

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」

文化観光推進地域計画



世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」
大森町の町並み

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」文化観光推進協議会

目次

1. 実施体制.....	p.2
2. 事務の実施体制.....	p.4
3. 計画区域.....	p.5
4. 基本的な方針	
4-1. 現状分析	
4-1-1. 主要な文化資源.....	p.6
4-1-2. 観光客の動向.....	p.10
4-1-3. 他の地域との比較.....	p.17
4-2. 課題.....	p.17
4-3. 文化観光拠点施設を中核とした文化観光の総合的かつ一体的な推進のため取組を強化すべき事項及び基本的な方向性.....	p.19
4-4. 文化の振興を起点とした、観光の振興、地域の活性化の好循環の創出.....	p.20
5. 目標.....	p.22
6. 目標の達成状況の評価.....	p.26
7. 中核とする文化観光拠点施設.....	p.27
8. 地域文化観光推進事業	
8-1. 事業の内容	
8-1-1. 文化資源の総合的な魅力の増進に関する事業.....	p.34
8-1-2. 地域内を移動する国内外からの観光旅客の移動の利便の増進その他の地域における文化観光に関する利便の増進に関する事業.....	p.36
8-1-3. 地域における文化観光拠点施設その他の文化資源保存活用施設と飲食店、販売施設、宿泊施設その他の国内外からの観光旅客の利便に供する施設との連携の促進に関する事業.....	p.38
8-1-4. 国内外における地域の宣伝に関する事業.....	p.38
8-1-5. 1～4の事業に必要な施設又は設備の整備に関する事業.....	p.39
8-2. 特別の措置に関する事項	
8-2-1. 必要とする特例措置の内容.....	p.40
8-2-2. オブジェ等の設置に関する取組等.....	p.40
8-3. 必要な資金の額及び調達方法.....	p.41
9. 計画期間.....	p.44

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」文化観光推進地域計画

1. 実施体制

協議会	名称	世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」文化観光推進協議会		
申請者① 協議会の構成員 である市町村又は都道府県	名称	大田市	所在地	島根県大田市大田町大田口 1 1 1 1 番地
	代表者	大田市長 楫野 弘和		
申請者② 協議会の構成員 である市町村又は都道府県	名称	島根県	所在地	島根県松江市殿町 1 番地
	代表者	島根県知事 丸山 達也		
申請者③ 中核とする文化 観光拠点施設の 設置者	施設の 名称	石見銀山 世界遺産センター	施設 所在地	島根県大田市大森町イ 1 5 9 7 番地 3
	設置者の 名称	大田市	設置者 所在地	島根県大田市大田町大田口 1 1 1 1 番地 (教育部石見銀山課)
	代表者	大田市長 楫野 弘和		
申請者④ 中核とする文化 観光拠点施設の 設置者	施設の 名称	いも代官ミュージアム (石見銀山資料館)	施設 所在地	島根県大田市大森町ハ 5 1 番地 1
	設置者の 名称	NPO法人石見銀山資料 館	設置者 所在地	同上
	代表者	館長 仲野 義文		

申請者⑤ 中核とする文化 観光拠点施設の 設置者	施設の 名称	龍源寺間歩	施設 所在地	島根県大田市大森町ニ 1 8 3 番地
	設置者の 名称	大田市	設置者 所在地	島根県大田市大田町大田口 1 1 1 1 番地 (産業振興部観光振興課)
	代表者	大田市長 梶野 弘和		
申請者⑦ 文化観光推進 事業者	名称	一般社団法人大田市観光 協会 (地域DMO)	所在地	島根県大田市仁摩町大田 4 2 番地 1
	代表者	代表理事 谷本 隆臣		
申請者⑧ 文化観光推進 事業者	名称	大田商工会議所	所在地	島根県大田市大田町大田イ 3 0 9 番地 2
	代表者	会頭 斉藤 寛		
申請者⑨ 文化観光推進 事業者	名称	銀の道商工会	所在地	島根県大田市温泉津町小浜イ 3 0 8 番地 6
	代表者	会長 小川 良知		

2. 事務の実施体制

本計画においては、大田市の誇る世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」を、石見銀山遺跡が紡いできた歴史・文化を再認識し、人類共有の貴重な財産である世界遺産として未来へ引き継いでいくとともに、国内外に向けた情報発信や交流の促進、来訪者にとって魅力ある地域づくりなど、交流人口の拡大や地域経済の活性化を図るため、下記の体制を主として、相互に連携・協力しながら文化観光の推進に取り組む。

【自治体】（島根県、大田市）

大田市政策企画課が世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」文化観光推進協議会の事務局を担い、島根県からの助言を受けながら、計画全体の調整を行うとともに、国に対する申請、報告文書作成などの取りまとめを行う。また、島根県及び大田市が相互に連携し、遺跡における体験コンテンツの開発や国内外に向けた情報発信、国内外の都市・施設などとの交流の促進について中心的な役割を担う。

【文化観光拠点施設設置者】（NPO法人石見銀山資料館、大田市石見銀山課、大田市観光振興課）

人類共有の貴重な財産である世界遺産を確実に後世に守り伝えるとともに、その価値や魅力を広く、的確に伝えるための環境整備などに関する事業を推進する。

【商工担当課及び関係団体】（一般社団法人山陰インバウンド機構（広域連携DMO）、公益社団法人島根県観光連盟（地域連携DMO）、一般社団法人大田市観光協会（地域DMO）、大田商工会議所、銀の道商工会、大田市産業企画課・観光振興課）

遺跡の魅力を活かした新たな旅行商品・土産物の開発や周遊促進を図るための2次交通の充実など、来訪者の受け入れ体制の充実を図るための事業を推進する。

大田市観光協会（地域DMO）においては、大田市観光振興課と連携するとともに、山陰インバウンド機構及び島根県観光連盟との広域連携を行い、大田市における観光データの収集・整理・分析の実施や観光サイトの充実を図る。また、各地の強みを活かした文化観光に関する体験プランや旅行商品の造成やマーケティングに関して中心的な役割を担う。

山陰インバウンド機構（広域連携DMO）には、県をまたいだ広域な連携の中で、インバウンドや観光商品造成などについて助言・協力をいただくとともに、島根県観光連盟（地域連携DMO）には、市町をまたいだ県内連携の中で、誘客や観光商品造成などについて助言・協力をいただく。

※施行規則第1条2項1号の文化観光推進事業者…一般社団法人山陰インバウンド機構（広域連携DMO）、公益社団法人島根県観光連盟（地域連携DMO）、一般社団法人大田市観光協会（地域DMO）

【世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」文化観光推進協議会】

当計画申請者の関係者で構成し、地域計画の作成や変更、事業推進などに関する協議・調整、計画の進捗管理・評価分析及び事業実施主体に対して計画推進のために必要な助言を行う。

< 構成員 >

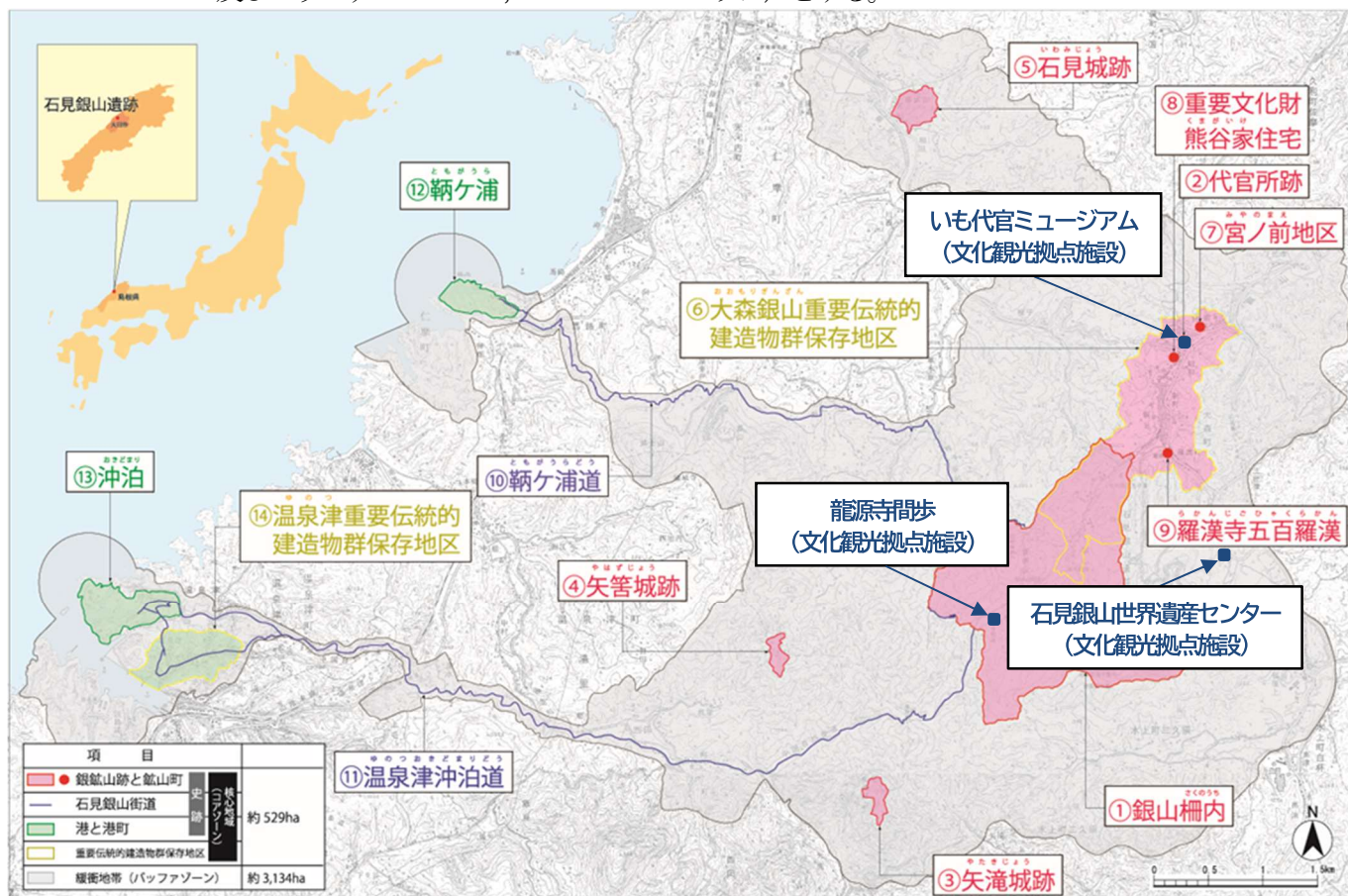
NPO法人石見銀山資料館、一般社団法人大田市観光協会（地域DMO）、大田商工会議所、銀の道商工会、島根県、大田市

< 事務局 >

大田市政策企画課

3. 計画区域

本計画の計画区域は、2007年7月2日に世界遺産登録された「石見銀山遺跡とその文化的景観」一帯（コアゾーン529ha及びバッファゾーン3,134haのエリア）とする。



4. 基本的な方針

4-1. 現状分析

4-1-1. 主要な文化資源

【世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」（登録：平成19年7月2日）】

石見銀山は、1527年に本格的な開発が開始され、1533年には大陸から銀製錬法の灰吹法を国内でいち早く導入し、日本を「銀の島」と呼ばせるほどの世界的な産銀国に導いた記念碑的な鉱山である。

1923年に事実上の閉山を迎えるまでの約400年にわたる鉱山活動の痕跡は、鉱山をはじめ、鉱山への物資の搬出入を担った往時の港や街道、その近辺に位置する山城といった考古学的な遺跡から、今なお人々の暮らしが継続する鉱山町と港町にまで及んでおり、これらの文化資源は一括して「石見銀山遺跡とその文化的景観」として平成19年にユネスコ世界遺産に登録された。認められた世界遺産の価値基準は(ii)「東洋と西洋の文化の交流を導いた」、(iii)「遺跡としてよく残る」及び(v)「鉱山活動の総体を示す土地利用」である。構成資産は、「銀鉱山跡と鉱山町」、「街道」、「港と港町」の3つの分野に大別される以下の14件からなる。

世界経済に大きな影響を与えた鉱山活動が評価されつつも、個々の構成資産の集合体として遺産が構成されているため、他の世界遺産に見られるような壮麗な建造物や圧倒するような景観で成立していない。よって、それぞれの構成資産は、説明がなければ、鉱山跡は、地表面の植生が回復して樹木が鬱蒼とする山塊に見え、町並みは、国内でも随所に残る歴史的風情のひとつに捉えられがちである。

しかしながら、16世紀には、「銀が地球を丸くした」といわれるように、南米と石見銀山から始まる日本の産銀によって、人類史上初めてとなる「経済の一体化（グローバル化）」を成立させたという大きな世界史的意義を有している。

日本史においても、それまで主たる輸出物を持たなかった農業を主体とするわが国が、石見銀山の本格的開発によって世界有数の産銀国となり、海洋帝国のポルトガル、スペインの東アジア進出を促し、結果、鉄砲を伝来させ、キリスト教を招来し、戦国時代から近世への転換を産み出すこととなった。さらには国際社会に組み込まれつつも植民地化せず、経済強国になりえた背景に銀の増産があることから、「石見銀山が無ければ今の日本は無かった」と評されている。

これらの歴史的価値に加えて、石見銀山が世界遺産として評価された大きな点は、江戸幕府による循環型の森林管理により植生を維持し、森林資源の枯渇を回避したという日本ならではの「自然との共生」がある。登録が決定した第31回世界遺産委員会の審議において、委員国から「16世紀から、しかも環境に負荷を与える鉱山において、自然の共生した鉱山活動を行っていた証拠である石見銀山が世界遺産に登録されることは、21世紀の人類の課題に対して大きなメッセージとなる」と称賛され、賛成意見が相次ぎ、登録決定に至った経緯がある。石見銀山の情報発信にはこうした登録の背景とその意義を伝える側面がある。

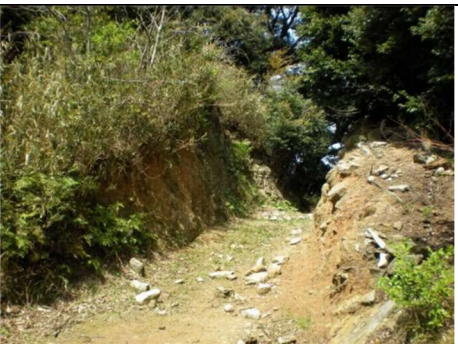
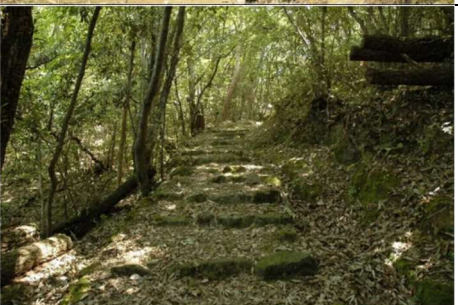
○銀鉱山町跡と鉱山町

構成資産	概要	
①銀山柵内 ぎんざんさくのうち	16世紀前半から本格的に開発され、20世紀前半まで操業された銀鉱山遺跡の本体。江戸時代初め、柵で厳重に囲まれていたことからこの地名がある。 銀の生産活動はもちろんのこと、生活・流通・信仰・支配に関わる遺構・遺物が良好に残る。	
②代官所跡 だいかんしよあと	17世紀に銀山柵内から大森地区に移転した石見銀山支配の中核施設。 1815年に再建された表門・門長屋が残る。	

③や たちょうあと矢滝城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、温泉津沖泊道が近くを通る。 中世山城の立地形態をよく留める。	
④や はずじょうあと矢筈城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、温泉津沖泊道を挟んで矢滝城と対峙する。 中世山城の立地形態をよく留める。	
⑤いわみじょうあと石見城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、仁摩方面に出る街道沿いを守備する。 中世山城の立地形態をよく留める。	
⑥おおもりぎんざん大森銀山重要伝統的建造物群保存地区	銀山に隣接して発展した、江戸時代幕府直轄地の石見銀山附御料150余村の中心町。 武家商家の旧宅や、社寺などが混在している。 昭和62年の国選定。	
⑦みやのまへちく宮ノ前地区	大森地区の代官所跡近くで発見された、16世紀末～17世紀初頭の銀製錬工房跡。	
⑧重要文化財 くまがいけじゅうたく熊谷家住宅	大森地区における最大規模の商家建築。有力商人の地位や生活の変遷を最もよく示している。	

⑨らかんじごひやくらかん羅漢寺五百羅漢	岩盤に3つの石窟を穿ち、石造の三尊仏と羅漢座像500体を安置する。 18世紀中頃の制作で、石見銀山の石造物文化を代表する信仰遺跡。	
---	--	--

○街道（石見銀山街道）

構成資産	概要
⑩ともがうらどう鞆ヶ浦道	鞆ヶ浦が銀・銀鉱石の積出港として機能していたときに利用された全長7kmの街道。 
⑪ゆのつおきどまりどう温泉津沖泊道	石見銀山の外港であった温泉津・沖泊と柵内を結ぶ全長1.2kmの街道。 17世紀初頭に尾道道が開発された以降も銀山と港を繋ぐ幹線路であった。 

○港と港町

構成資産	概要
⑫ともがうら鞆ヶ浦	16世紀前半から中頃にかけて銀・銀鉱石を博多に積み出した港。 船の係留用に自然の岩盤をくり抜いた鼻ぐり岩などが中世港湾を彷彿とさせる。 繁栄した頃の土地利用を引き継ぐ集落景観も貴重である 
⑬おきどまり沖泊	主に16世紀後半の約40年間、銀の輸送や、石見銀山への物資輸送、軍事拠点として機能した港。二つの城跡や鼻ぐり岩などが往時を偲ぼせる。 温泉津と一体となって歴史を重ねた場所であり、集落は往時の土地利用を今に引き継いでいる。 

ゆのつ ⑭温泉津重要伝統的建造物群保存地区	石見銀山の外港として発展した温泉のある港町。 江戸時代以来の町割りをよく残し、町屋、廻船問屋、温泉旅館、社寺等の伝統的建造物がよく残る。平成16年、温泉町としては日本唯一の国選定を受けた。	
----------------------------------	---	--

○関連する文化観光施設

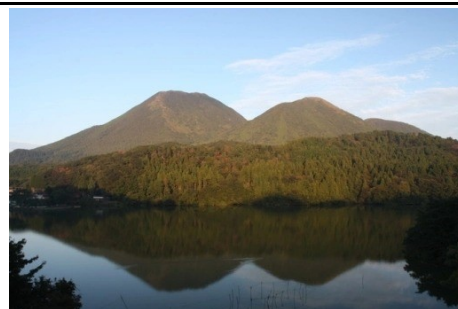
施設名	設置者	概要
石見銀山世界遺産センター ※文化観光拠点施設	大田市	平成20年に整備された石見銀山の拠点施設。来訪者の一次受け入れ、ガイドンス、展示、収蔵・体験学習機能を備え、調査研究と遺産保全のスタッフを配した石見銀山中核施設。 展示は、多年にわたる発掘調査での出土品を中心に模型・映像・レプリカを配して遺産の価値を紹介している。 
いも代官ミュージアム（石見銀山資料館） ※文化観光拠点施設	NPO法人石見銀山資料館	代官所跡地に所在するミュージアム。昭和51年に地元に残る史資料を収蔵展示する石見銀山資料館として開館した。 平成30年にはNPO法人化。令和3年には愛称を「いも代官ミュージアム」とし、石見銀山の紹介のみならず地域文化の発展及び研究の振興に寄与している。 
龍源寺間歩 ※文化観光拠点施設	大田市	現存するもので唯一、通り抜けが出来る、年間を通して公開されている間歩（坑道跡）。公開されているのは157m（新坑道と合わせると273m）。坑道の壁面には当時のノミの跡がそのまま残り、垂直に100mも掘られた堅坑も見ることができる。

○その他、周辺の文化資産

名称	概要
日本遺産 「神々や鬼たちが躍動する神話の世界～石見地域で伝承される神楽～」	島根県西部、石見（いわみ）地域一円に根付く地域の伝統芸能でありながらも、時代の変化を受容し発展を続けてきた神楽（かぐら）。現在も社中など、130を超える神楽団体が存在し、伝承と創造を行っている。 日本遺産認定日：令和元年5月20日（大田市、浜田市、益田市、江津市、川本町、美郷町、邑南町、津和野町、吉賀町） 
日本遺産 「石見の火山が伝える悠久の歴史～」縄文の森”銀の山”と出逢える旅へ～」	島根県唯一の活火山・三瓶山がもたらす様々なめぐみによって構成される文化財。悠久の時を超え、現在でも様々な形でその軌跡をたどることができる。

日本遺産認定日：令和2年6月19日

※三瓶山は大山隠岐国立公園の一部



国の指定選定の文化財については以下の一覧のとおりである。

○国指定等文化財

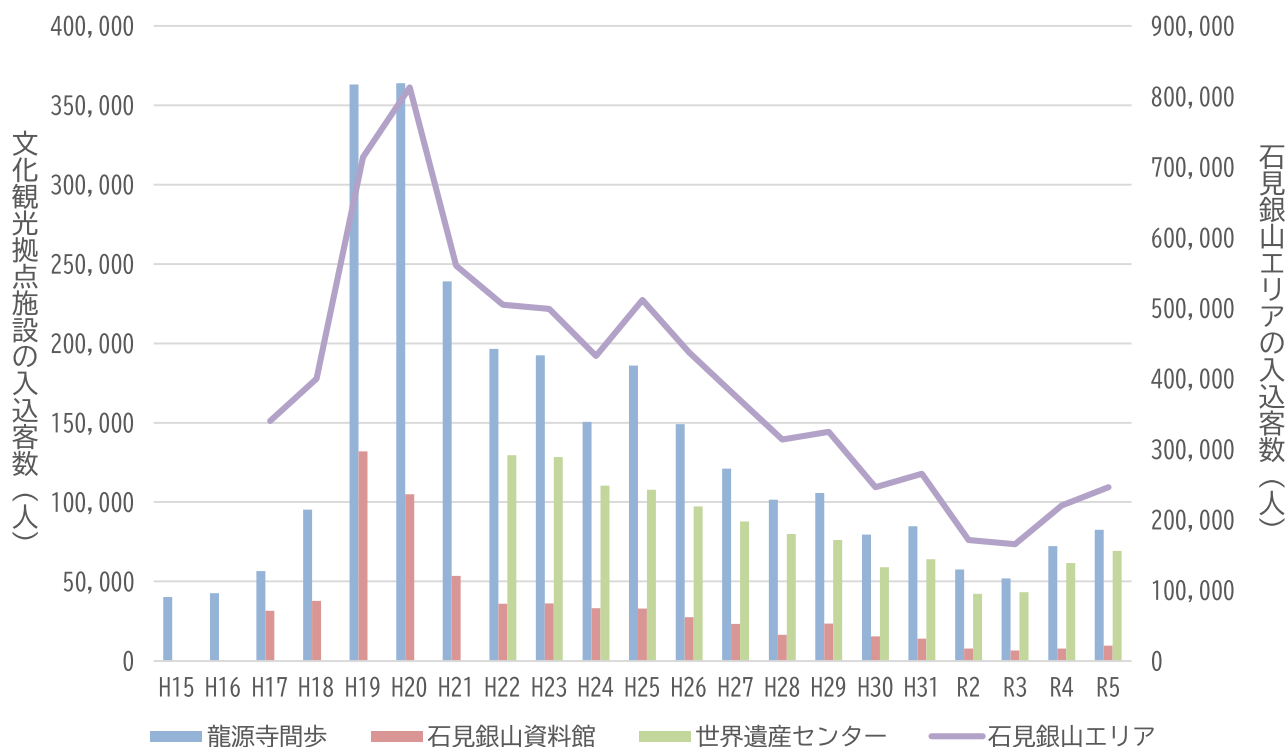
文化財分類	名称
史跡	石見銀山遺跡（再掲）
重要文化財	熊谷家住宅 辻が花染丁子文道服
重伝建地区	大森銀山伝統的建造物群保存地区、温泉津伝統的建造物群保存地区（再掲）

これらの世界遺産をはじめとする文化資源、さらには地域の食文化や地域の人々と交流拠点となる「道の駅ごいせ仁摩」「道の駅ロード銀山」などの施設をつなぎ、回遊を推進する仕組みを構築する必要がある。

4-1-2 観光客の動向

本計画における中核的な文化資源である世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」のある石見銀山エリアへの来訪者数は、平成19年に世界遺産登録へ登録されたことに伴い急激に増加し、翌年の平成20年には81万人となりピークを迎えたが、それ以降は減少傾向にある。令和5年においてはコロナ禍が明けた影響もあり、若干の増加傾向にあるものの、ピーク時（平成20年）との比較で30.3%の入込客数となっている。世界遺産センターなどの文化観光拠点施設においても、同様の傾向にある。

石見銀山全体の入込客数については、ピーク時は完全なオーバーツーリズムであったが、現在、来訪者・地元の調和がとれ、持続的な来訪地として適切な入込客数と見込む年間40万人と現状値（令和5年）の25万人には大きな乖離があり、入込客数の増加は喫緊の課題であると言える。



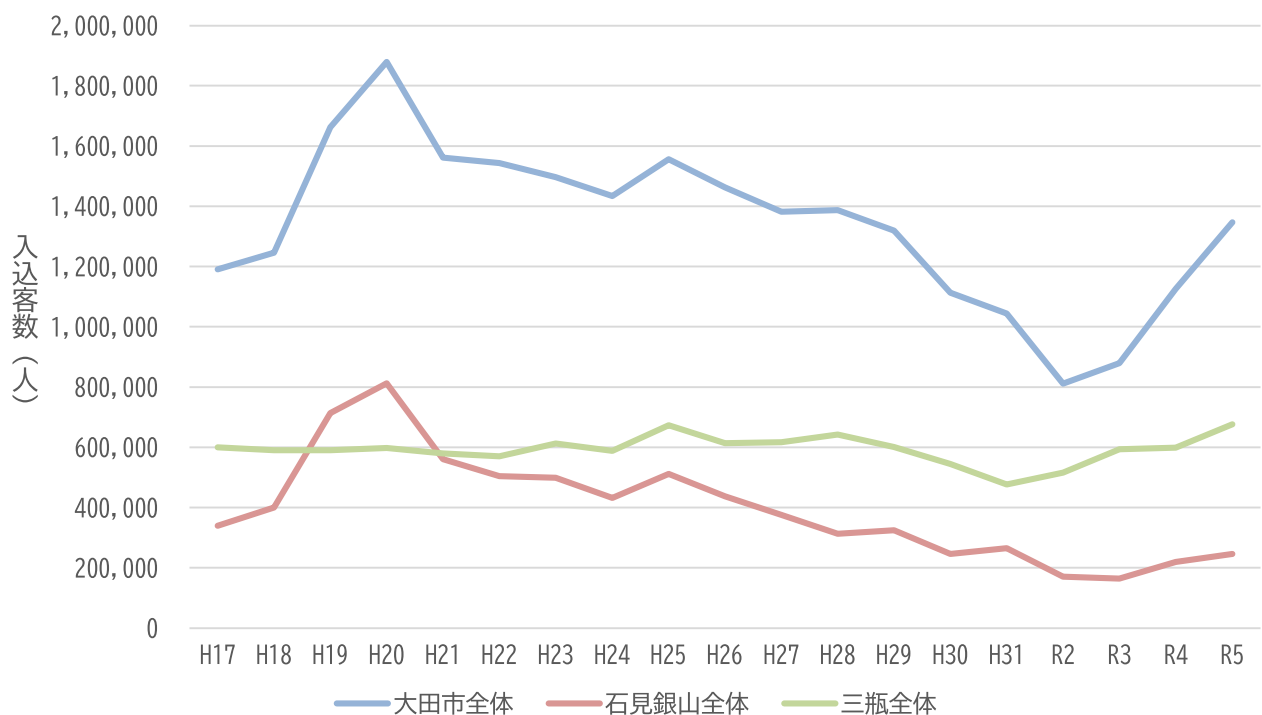
出典：大田市観光動向調査

【平成20年（ピーク時）以降の来訪客数の推移】

	平成20年	平成25年	平成30年	令和5年
龍源寺間歩	363,814人	186,089人[51.1%]	79,502人[21.9%]	82,592人[22.7%]
石見銀山資料館	104,878人	32,941人[31.4%]	15,365人[14.7%]	9,520人[9.1%]
世界遺産センター	(H22年) 129,613人	107,667人[83.1%]	58,921人[45.5%]	69,248人[53.4%]
石見銀山全体	813,200人	511,600人[62.9%]	246,300人[30.3%]	246,100人[30.3%]

※[]内は平成20年からの伸び率（世界遺産センターは平成22年比）
出典：大田市観光動態調査

大田市全体の入込客数については、概ね石見銀山の入込客数と同調して変動している。同市内の観光地である三瓶エリアについては年間60万人でほぼ横ばいとなっている。三瓶エリアの主要な施設として、子どもから大人まで楽しめる自然系博物館の三瓶自然館サヒメルや6つある三瓶山の峰のひとつ大平山の山頂近くまで登ることができる三瓶観光リフト、中国山地の中でも有数の湧出量を誇る三瓶温泉などが、多くの観光客を楽しませている。

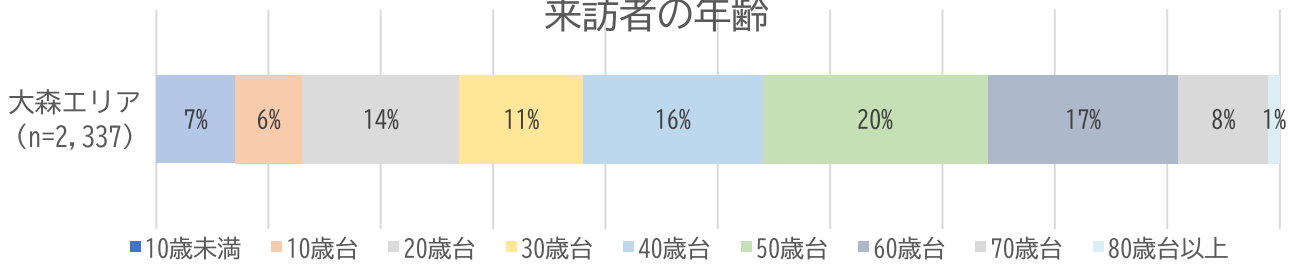


出典：大田市観光動態調査

石見銀山遺跡の主要な観光資源がある大森エリアへの来訪者の年齢については、50歳台が最も多い20%で、40歳台から60歳台の来訪が53%を占める。また、その半数以上が初回の訪問であること、また家族連れでの訪問であることが明らかになっている。

今後、安定的な入込を期待しつつ、地元の住民が願う「穏やかさと賑わいの両立」を叶えるためには、文化的好奇心の強い30歳台から40歳台の観光客をターゲットに、当該エリアへのファンとなっていただくことでリピーターとしての定着を図りつつ、次の段階でグループとして来訪する家族への波及を期待し、持続的な誘客を図りたい。

来訪者の年齢



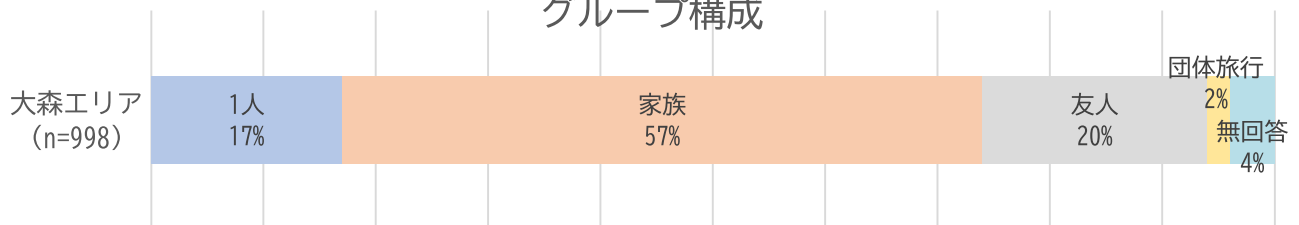
出典：大田市新観光振興計画（R4）

訪問回数



出典：大田市新観光振興計画（R4）

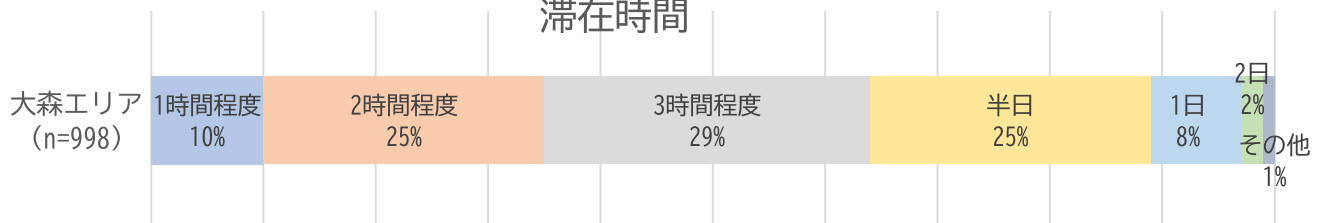
グループ構成



出典：大田市新観光振興計画（R4）

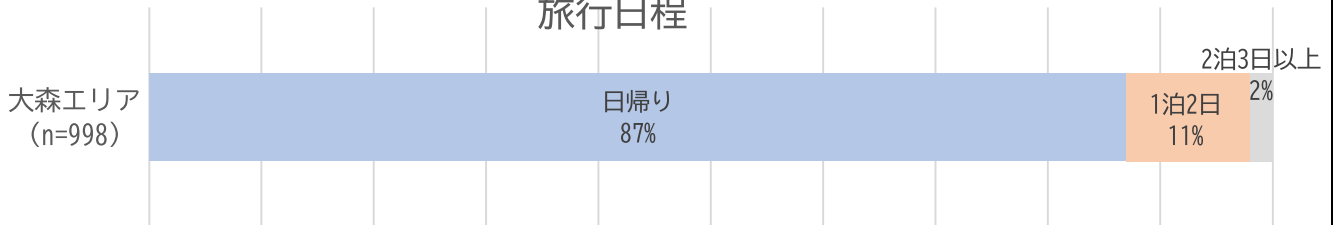
滞在時間については大森エリアの入り口である石見銀山世界遺産センターから龍源寺間歩までを観光すると概ね3時間程度を要することから、3時間程度とする割合が最も多くなっていると推測するが、半日以上を要している割合が33%を占めていることもあり、一定数、大森をじっくり観光したいというニーズを持つ観光客がいることがうかがえる。一方、旅行日程については日帰りが圧倒的に多く87%となっている。大森エリアにおける宿泊施設も限られているため、近隣の宿泊地などとのアクセスしやすさなど、観光客にとって利便性が高まる仕組みづくりが必要であると考えられる。

滞在時間



出典：大田市新観光振興計画（R4）

旅行日程



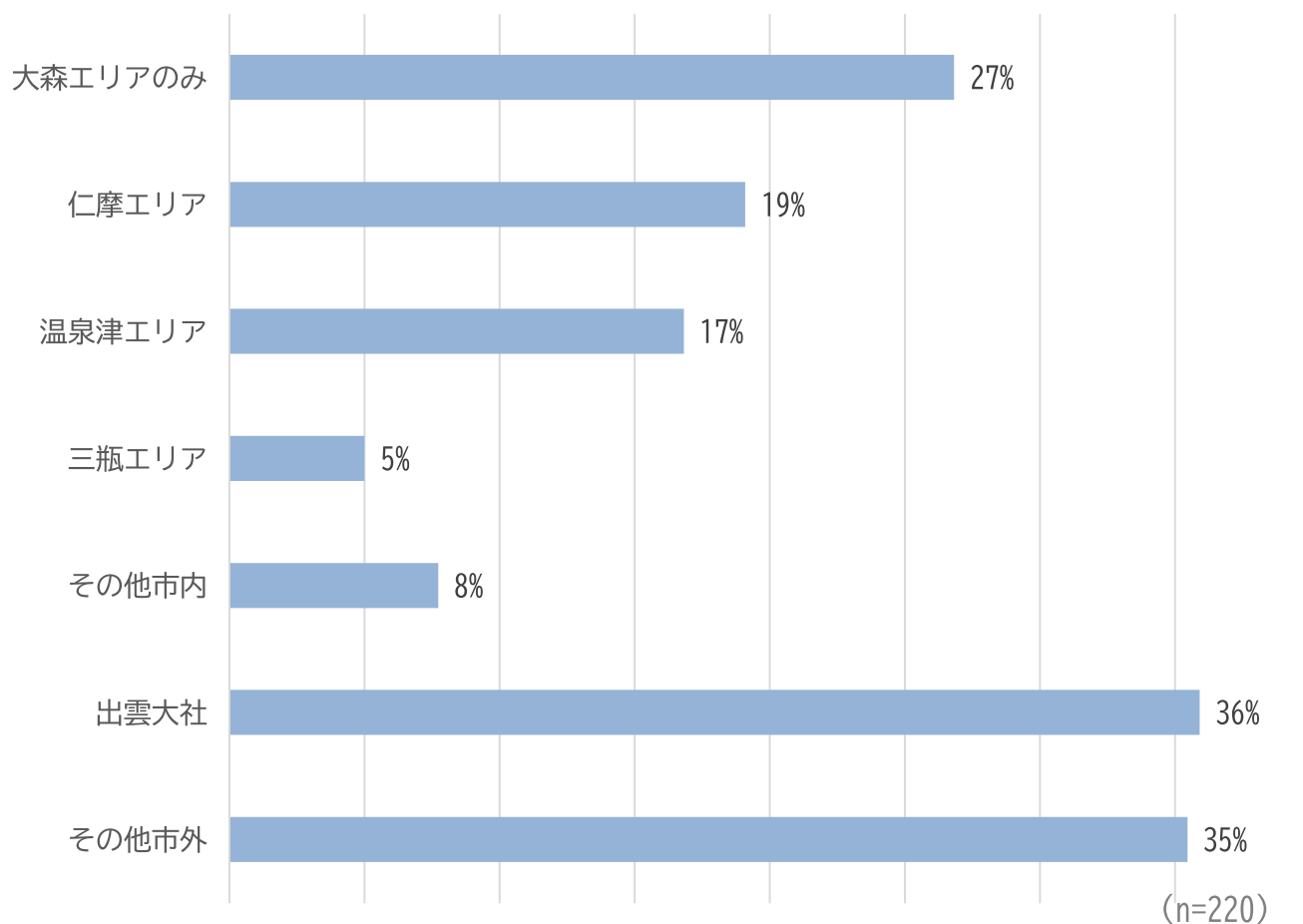
出典：大田市新観光振興計画（R4）

また、大森を訪れる観光客の内、73%が他地域も含めた観光を行っており、その訪問先としても最も多いのが出雲大社の36%であり、続いて大森近隣の仁摩エリア19%、温泉津エリア17%となっている。一方、市内の主要観光地である三瓶との周遊を行っている割合は5%と低い。三瓶エリアについては、市内の重要な宿泊地でもあるため、宿泊地に課題を抱える大森エリアと三瓶エリアとを繋げる2次交通の確保については大きな課題であると考えられる。

大森エリアに次いだ石見銀山の主要な地域であり、市内の重要な観光・宿泊地である温泉津エリアにおいては、近年、地元住民が主体となった地域の高付加価値化の取り組みにより、観光客からの評価が高まっている話題のスポットである。大森エリアと温泉津エリア、それぞれの文化観光資源を活かしつつ、その両エリアを繋げる周遊プランの造成などにより、宿泊地の確保を図るとともに、広域に広がる世界遺産に様々な方面から触れる体験を充実させ、石見銀山の価値や魅力の理解を深めることで、旅行客の満足度向上について期待できると考えるため、温泉津エリアを周遊先として選択する旅行者の増加については重点的に取り組んでいきたい。

また、出雲大社に周遊を行っている観光客については、79人中78人が県外からの訪問であった。石見銀山と出雲大社は共に歴史的な魅力が強い観光地であるため、両観光地を周遊する観光客については、歴史的な好奇心が高いことが想像できる。石見銀山遺跡の魅力を引き上げ、その魅力を分かりやすく伝えることや、体験コンテンツの充実させることにより、石見銀山・出雲大社を周遊するような観光客の満足度を上げ、観光地としての評価を高めることで、口コミやサイトのレビューなどにより評判を広め、県外を中心に、さらなる来訪者を呼び込む契機としていきたい。

県内の他地域との周遊について



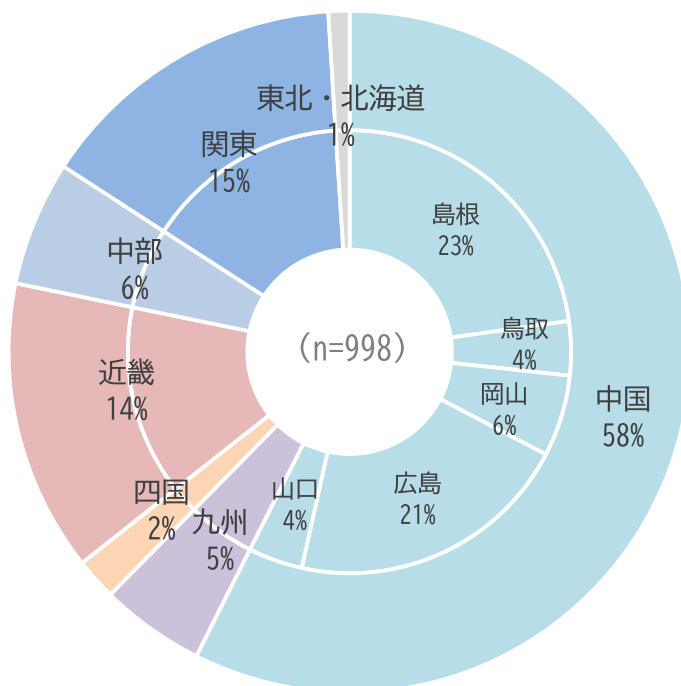
出典：大田市観光動向調査

来訪者の出発地については、中国地方が58%を占めており、内訳は島根県23%、広島県21%と続く。地方で見ると関東地方15%、近畿地方14%と続くが、近年は割合が減少傾向にある。

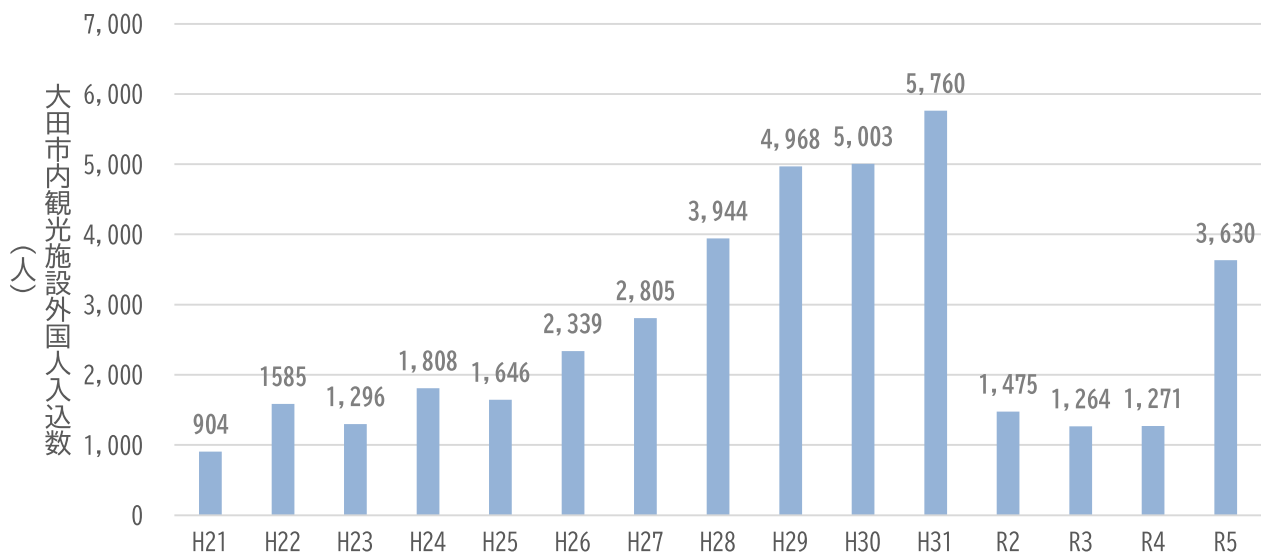
インバウンドについては、石見銀山地域全体の外国人入込客数は把握できていないが、令和5年度（コロナ前）においては3千人程度であったと推定している。市内全体の外国人観光客入込数については、集計を始めた平成23年以降増加傾向にあり、令和2年以降は新型コロナウイルスの影響を受け減少したが、令和5年以降は入込数を取り戻しつつある。アジアからの来訪者が最も多い41.1%であり、他の地域、特に欧州や北米からの誘客には積極的に取り組んでいく必要があると考えている。

全国的に増加しているインバウンドの起点であるゴールデンルートからの誘客に注力し、人口が多いが来訪者数の割合が減少傾向にある関東・近畿地方からの来訪増加を促すとともに、日本の文化理解や体験を求めて比較的長期間来日する欧米豪からの訪問者の増加に取り組む事で、観光消費額の増加を図りたい。

来訪者の発地

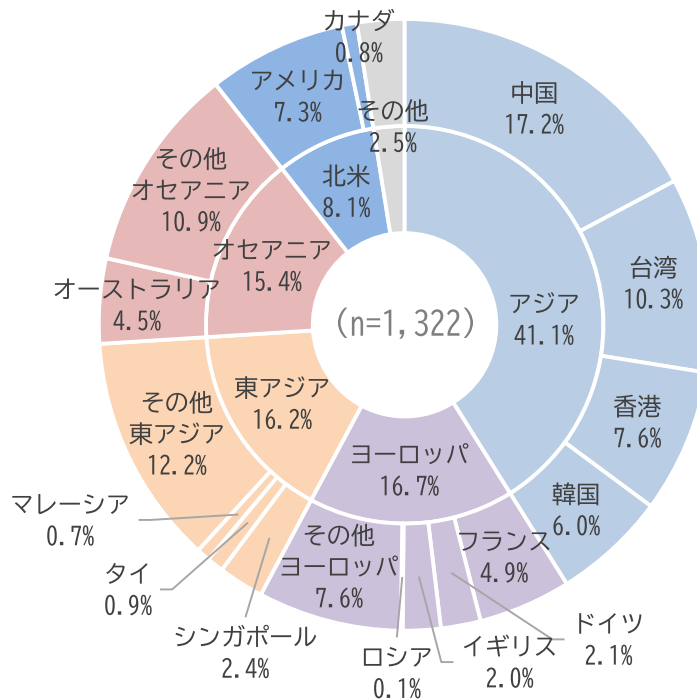


出典：大田市新観光振興計画（R4）



出典：大田市観光動態調査

大田市の外国人宿泊客の国籍別割合（令和元年）



出典：大田市新観光振興計画（R4）

<本計画で注力するターゲット像について>

上記のことなどを踏まえつつ、今後、誘客を促進するにあたっては、文化的好奇心が強く、石見銀山遺跡の持つ価値や歴史的意義に興味を持ち、深い文化的理解や体験を重視する旅行者が重要なターゲットであると考え。そこで本計画において注力するターゲットについては以下の通りとする。

○国内

出雲市における観光入込客延べ数は年間1,000万人を超えており、宿泊をする観光客の割合の約5割が関東・関西圏からの来訪である（出雲市観光動態調査より）。出雲市に向けては山陽側からのアクセスも良く、広島県からの来訪者も多い。令和6年度中には出雲市と大田市を繋ぐ「山陰道」が開通することから、出雲市の主要な観光地である出雲大社から石見銀山遺跡に流入してくる文化的な好奇心の高い観光客が一定数存在することは期待できると考える。そのため、ゴールデンルート（関東・関西・広島圏域）から来訪する文化的好奇心の高い30歳台から40歳台をターゲットとして捉え、それらの観光客の満足度を向上し、石見銀山のファンとして取り込むことで、リピーターとしての定着を図り、さらにはそのファミリーへの波及を促すことで、継続的な入込客数の確保を図りたい。

○国外（インバウンド）

アジア系では、広島空港や米子空港に直行便があり、かつ現在大田市に宿泊する外国人のうち多くの割合を占める台湾・韓国人観光客をターゲットとし、その底上げを図る。なお、台湾については、大田市と同じく鉱山遺跡を有する都市との交流が進められつつあることから、そのネットワークを活用した誘客促進も図る。

欧米系では、日本の伝統文化、日常生活等に関心の高い関心を持ち、スローツーリズム志向が強くなっているフランスを主なターゲットに据える（フランスは、県の外国人観光客誘客の重点市場にも位置づけられている）。日本庭園で有名な足立美術館や歴史文化がよく残る松江を訪れるフランス人が一定数いることから、大田市域へ足を延ばしてもらうような取り組みも進める。

なお、インバウンドについては、コロナ禍明け以降、市場の急速な回復と高まりを見せていることから、そのトレンドを押さえ、適宜インバウンドの取り込みに向けた策を検討し、機を逸することなく実施をしていきたい。

4-1-3. 他の地域との比較

石見銀山での銀の大量生産は、その流通によってアジアだけでなくヨーロッパ諸国との経済的、文化的交流をもたらした。銀鉱山に関わる遺跡は自然環境と一体となった文化的景観を形成し、自然と共生してきた土地利用が今に伝えられていることが最大の特色であることから、本計画ではそれらの遺跡を伝える施設や間歩（坑道跡）を文化観光拠点施設として位置付けることにしている。

大田市と同様に歴史文化資源を主たる観光資源とする出雲市と比較した場合、観光客数では大田市が約110万人であるのに対し、出雲市は約1,050万人で約1/10、宿泊客数においては、大田市が約10万人であるのに対し、出雲市は約70万人で約1/7、またインバウンド宿泊客数については大田市が約170人であるのに対し、出雲市では約1,580人で約1/10と、行政規模の差を考慮しても大きな格差が存在する状況にある（令和4年島根県観光動態調査結果より）。

この要因としては、地理的な条件や交通アクセス（一次交通）の条件を前提として、歴史文化資源の国内外への情報発信や観光資源を活用したコンテンツの造成、来訪者の利便性等の向上に向けた基盤整備などが不十分であることが想定され、それらの整備や受入体制が整っていないことが本市における「弱み」となっている。

さらに、出雲市における歴史文化資源は建造物のようにその魅力をダイレクトに伝えることが可能であるのに対し、大田市は地下遺構である遺跡が歴史文化資源の主体にあるため、その魅力を伝えるためには詳細な説明や事前知識が必要となることも「弱み」といえる。

一方、最盛期には世界の産銀量の約3分の1を占めた日本銀の多くが石見銀山で産出され、坑道跡や工房など銀生産に関わる遺跡が豊富で状態良く残されており、これが大田市のもつ最大の「強み」であり、それに加えて、当時を彷彿とさせる趣深い町並みには今も人々が暮らし、歴史文化を伝え残しており、日本の原風景を彷彿とさせる歴史的風土という「景観資本」も大きな本市の「強み」となっている。また、文化観光拠点施設として位置付けている遺跡は、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の構成資産であり、国内に限らず、全世界に対して強力な訴求力・発信力をもつ観光資源であることも大きな「強み」といえる。

本計画においては、石見銀山遺跡の“魅力の伝えづらさ、分かりづらさ”や“交通アクセスの不便さ”といった「弱み」を改善し、“石見銀山の持つ歴史的意義や価値・魅力”といった「強み」を、誰にでもわかりやすく、接しやすく発信することで、発展的で持続的な文化観光を実現することが重要であると考えます。

4-2. 課題

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の構成資産の面積は529.17ha、緩衝地帯は3,134haの広さがある。遺産の約500年にわたる歴史の重層性とともこうした広域性を特徴としているため、来訪者にとっての価値理解の困難さを始め、構成資産間の周遊方法、さらには周辺の人気観光地との連携や地元のアクティビティコンテンツとの連動など、様々な課題を有している。

<課題1 石見銀山の世界的な価値が、現地で十分に伝えられていない>

- ・遺産の総合的な受入の拠点施設として石見銀山世界遺産センターを平成20年に開館させた。この施設を“コア”として、現地の施設を“サテライト”、各遺構や遺産の現地施設を“展示物”とみなした「石見銀山野外博物館」を基本理念として公開活用を実施してきた。しかしながら、拠点施設である石見銀山世界遺産センターにおける展示は、世界遺産としての石見銀山の価値基準の説明をコンセプトに構成されたためメッセージ性が低く、はじめて訪れる来訪者にとっては難解で、国外からの来訪者にとってはなおのこと世界遺産として、その「スゴさ」が伝わりにくいという課題が生じている。
- ・開館からおよそ20年を経過し、その後の調査研究成果の反映はもとより、近年増加している外国人旅行者や教育旅行、若年層への解説等について、必ずしも十分でないことが課題である。またバリアフリー化への対応も不十分であり、すべての人が快適に鑑賞できる環境整備も課題である。
- ・石見銀山が世界経済に影響した16世紀を体感できる場所は、鉱山の山頂近くに展開する「幻の鉱山町」と呼ばれた石銀（いしがね）地区とそこから南へ下った採掘の中心地の本谷地区である。石見銀山世界遺産センターで模型やパネル等で紹介を行っているが、現地へは部分的に舗装された市道が敷設されて、石銀地区の現地に解説板や一部に遺構表示が施されているものの、アクセスの難しさ、解説が無ければ現地の理解が困難である点などを課題としている。また本谷地区に至るルートは滑落の危険性のある谷間を通過する必要があるため、景観や遺構の保護に配慮した安全な見学ルートの整備と、周辺に展開する鉱山開発初期の露頭掘りや建物跡等のわかりやすい多言語解説を始めとした説示方法の改善を課題としている。
- ・現地施設においては、最大の入込スポットである公開坑道「龍源寺間歩」では、その狭小な坑道を通すだけの見学であるため、詳細な説明や事前知識が無ければインパクトが薄く、理解度や満足度の低さが課題となっている。
- ・いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）は、代官所門長屋（国史跡）の公開とともに陣屋町大森の歴史と鉱山

の経営や技術等について紹介してきた。

- ・しかし、既存の木造建物（旧郡役所）を活用しているため、展示スペースが小さく、収蔵資料を十分に活かした展示ができておらず、現地施設として代官所を拠点とする陣屋町の説明が十分に伝わらないことが課題である。
- ・併せて、石見銀山を訪れた観光客が、世界遺産センターを経由せず当館を訪れるケースもあり、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の概略が伝わりにくいことも課題である。
- ・石見銀山現地では地元の「石見銀山ガイドの会」がガイドツアーなどを実施し、観光客に石見銀山の魅力を伝えているが、外国語対応できるガイドが限られており、外国人観光客に対する対応が充分にできていない。今後、インバウンド需要の高まりを取り込もうとする中、外国人観光客に石見銀山の魅力を伝え続けるためには、高いクオリティで外国語対応ができるガイドを持続的に配置できる仕組み作りをする必要がある。

<課題2 周遊性を高めるための交通網の整備や促進が充分にできていない>

- ・世界遺産の構成資産の一つであり、近年注目度が高まっている大田市の宿泊地でもある温泉津温泉は、鉱山跡から直線距離で約10kmに位置しながら、直接的移動が可能な公共交通網がなく、また三瓶温泉においても同様であり、周遊性を高める二次交通の整備が課題である。
- ・令和6年度中に予定している山陰道「出雲-多伎間」の開通により、人気観光地の国宝松江城や玉造温泉、出雲大社のある島根県東部との高速道路網が繋がることとなる。この地域と石見銀山を結ぶ手段や手法を構築し、近隣主要観光地からの周遊性を高めることが課題である。
- ・山陰道の開通により、島根県東部や広島県域から車による往来が容易になる。また、広島空港をハブとした海外からの流入や、太平洋側の新幹線ルートを活用したゴールデンルートからの来訪もしやすくなることから、これまでにない新たな人の流れが生まれることが期待できる。そのため、新たな流れを把握し、持続的な流れとして取り入れるためには、早急にかつ集中的に動態調査を強化して行う必要がある。
- ・石見銀山遺跡は市の主要の駅であるJR大田市駅からバスやタクシーなどで移動する必要がある。また、JR大田市駅に降り立った観光客を石見銀山に誘導する案内板など、大田に来訪した観光客に対する石見銀山のアピールも必要だが、充分に設置できておらず、特に多国語対応が満足できていないことから、石見銀山までの移動方法などの分かりにくさ、大田に来られた観光客に対する石見銀山の積極的なアピールについて課題が残る。

<課題3 石見地域の民俗文化財や食文化などの伝統的な資源が有機的に提供できていない>

- ・石見銀山周辺で育まれてきた鉱山を核とした地域の文化は、飲食や伝統芸能にも及んでいる。特に温泉津の地酒や、温泉津焼、石見神楽といった文化資源は国内外からの評価が高いが、こうしたコンテンツの連携促進が充分にできておらず、課題としている。

<課題4 国内外に向けた情報発信が充分にできていない>

- ・町並みから間歩まで歩いて楽しむ世界遺産であることや、世界遺産の入口である「世界遺産センター」の存在、ゆっくりと楽しむためには3時間程度は必要、といったことなどの「タビマエ」情報が充分に発信できておらず、観光客の不満につながっているという課題がある。
- ・石見銀山を訪れる外客は、国地域別では台湾が最多であり、日本への興味関心の高さを示している。年間200万人の来訪者がある国際的な人気観光地九份は、石見銀山を近代に再開発した藤田組が開発経営した瑞芳鉱山の鉱山町であり、九份に隣接する新北市立黄金博物館との友好連携等による情報発信で、相乗効果による一層の興味関心の喚起と誘客促進を進める必要がある。
- ・スローツーリズム志向は石見銀山遺跡の観光との相性が良いと考えており、特に日本の文化理解や体験を求めて比較的長期間来日する欧米豪からの入込客数の伸びを期待する中、島根県と大田市が連携した海外に向けたPRが充分にできていない。今後、コロナ明けのインバウンド需要の回復とそれ以上の高まりについて、期を逃さず取り込むためには早急に強化する必要がある。
- ・国外への宣伝はもとより、インバウンドの起点であり、ゴールデンルート上にある首都圏や近畿圏に向けた情報発信が課題である。また関東・関西圏からの来訪客は減少傾向にあることから、都会地に向けた情報発信は特に課題としている。

4-3. 文化観光拠点施設を中核とした文化観光の総合的かつ一体的な推進のため取組を強化すべき事項及び基本的な方向性

<基本的な方向性>

令和9年は、石見銀山の本格的な開発から500年、また平成19年の世界遺産登録から20周年となる特別な年である。この節目を絶好の契機として、世界遺産登録から現在までの間で明らかとなった観光客の受け入れなどに関する様々な課題に対する取り組みを強化することで、国内外からの交流人口の増加による価値理解の促進を図り、地域資源として関係人口の増加による地域活性化を目指す。具体的には現地磨き上げによる遺産の「魅力化」と将来世代に引き継ぐための「持続化」を基本的な方向性とし、世界遺産登録20周年記念事業実行委員会（令和6年7月2日発足）と連動しながら、随時効果的な策を検討しつつ、力強く事業を推進することで、現状を打破していく考えである。

また、本計画の実施に際し、石見銀山への来訪者にとっての価値認識の戦略的目標として「感動的価値」を掲げている。かつての世界経済に大きな影響を与えた鉱山という歴史的背景を強調し、それらが小さな坑道から掘り出され、町工場のような小さな工房で産み出された営みであったことに焦点をあてつつ、往時の民家や武家住宅が忽然と山中に存在するという有様も付加することで、あたかも聖地巡礼のような「感動的」な価値を訴求していきたい。

<取組強化事項1 拠点施設での展示解説及び魅力増進・発信の強化（課題1関連）>

- ・「石見銀山遺跡とその文化的景観」の価値や歴史的意義をわかりやすい言葉やコンテンツで伝えるアウトリーチ活動を推進していく。具体的には、マイカーや広島方面からの高速バスによる見学者が最初に訪れるビジターセンターである石見銀山世界遺産センターと、路線バスと観光バスの発着点であり、町並み見学の拠点であるいも代官ミュージアムにおいて、①外国人旅行者や若年層にとっても鑑賞しやすい展示改修を行う。②デジタル化、アーカイブ化を進めるとともにコンテンツとして活用する。
- ・構成資産が広範囲で多岐にわたることから、価値理解のための選択と集中を行うこととした。重点となるエリアが本計画に示した拠点である。鉱山の山中奥深くや山城跡等の到達が困難な場所は、ビジターセンターで重点エリアに関連付けてその価値を紹介できるよう工夫する。
- ・約4kmの細長い谷間に展開する大森集落は、谷の北側に石見銀山資料館、南側には龍源寺間歩が位置し、この間を町歩きすることで暮らし文化を体感できるよう見学及び説示ポイント設定などを検討する。
- ・また、ビジターセンターにおいて、三瓶山の火山活動がもたらした地質・地下資源など、石見銀山を中心としたジオに関する事柄の紹介・解説を行うコーナーを設置する。
- ・龍源寺間歩では、ビジターセンターを経由せず直接現地に訪れる来訪者があることから、石見銀山の世界的、日本史的意義が十分に伝わるよう、現地での説明文をわかりやすい英語文とその翻訳による多言語化を行う。現地に残る遺構についても、ICT技術によるデジタル化を進め、丁寧かつ世界的に稀有である要素を抽出した外国語によるわかりやすい解説文を作成し、現地サインとデジタルマップにより展開する。
- ・鉱山の中心で価値理解の促進に有効な石銀・本谷地区では、アクセスが可能となるよう、路盤の整備と遺構の保存に留意した見学道の整備を進める。また、露頭掘りの顕在化を行い、多言語化したわかりやすい説示によるガイドツアー及び体験プログラムの開発と実施を進める。
- ・多言語によるガイドを実施し、外国人旅行者に的確に石見銀山の価値や「スゴさ」を理解し実感してもらうため、地域おこし協力隊制度を活用して、外国語通訳ガイドの経験を有する人材を配置し、ガイドの活動支援や研修会などを実施することにより、通訳ガイドの人材発掘と育成、さらには組織化を図り、持続可能な仕組み作りを行う。

<取組強化事項2 周遊性を高めるための取り組みの強化（課題2関連）>

- ・石見銀山（大森）に訪れた観光客に同じく世界遺産エリアに位置する温泉津地区への周遊を促すため、二次交通の運行導入を検討する。あわせて、大森には宿泊施設が少ないため、同市内の三瓶地区や温泉津地区にある宿泊施設への移動をしやすくすることで滞在時間延長を図る。また、シャトルバス等を運行し、PRなどにより利用促進を図ることで、周遊性を高める。いずれも継続的な運行定着に向け検討、実施する。
- ・山陰道「出雲-多伎間」の開通により生じる新たな人の流れを確実に取り込み、将来へ継続させるため、集中的に観光動態調査の強化を行い、今後の観光施策に反映させる。
- ・また、その観光動態調査で得た情報を参考に、宿泊・交通・アクティビティやモデルプラン・旅行商品などの情報を観光客により分かりやすい形で提供（特に「タビマエ」情報の強化）できるポータルサイトを構築し、観光客に対する利便性の向上を図る。
- ・大田市街地から石見銀山への移動の「わかりづらさ」を解消するため、JR大田市駅の屋外に多言語対応のデジタルサイネージを設置するとともに、石見銀山ポータルサイトへ誘導する2次元コード入りのぼり旗などを市内

各所に設置し、市内どこにいても情報をキャッチできるような仕組みを作る。

<取組強化事項3 地域の文化的な資源を文化観光に活かすための取り組みの強化（課題3関連）>

- ・石見銀山の新たな側面（魅力）を発信するため、石見銀山に関する調査研究により明らかになった事柄をテーマに、石見銀山の魅力を伝える土産物等を開発する。
- ・日本遺産「石見の火山が伝える悠久の歴史」にも石見銀山関連の構成文化財があり、また各種観光調査で評価され人気の高いもう一つの日本遺産「神々や鬼たちが躍動する神話の世界」の構成文化財である石見神楽も石見銀山地域に深く根付いているため、世界遺産と2つの日本遺産はあらゆる面で密接に関わっている。この石見神楽の鑑賞を、例えば「温泉津の地酒」や三瓶のもたらす「三瓶そば」などの食と組み合わせることで、質の高いコンテンツとして磨き上げ、石見銀山の魅力が一体的にデザインされた旅行商品を提供することで、観光客の満足度を高める。
- ・それに加え、「窯元と作る手びねり体験」や「神楽面絵付け体験」などの体験型商品の造成・販売促進を行い、これら体験プログラムを組み込んだツアーも外国人観光客に向けても発信し、外国人旅行者及び宿泊人数の増加を図る。

<取組強化事項4 国内外に向けた情報発信の強化（課題4関連）>

- ・観光動態調査で得た情報を参考に、宿泊・交通・アクティビティやモデルプラン・旅行商品などの情報を観光客により分かりやすい形で提供（特に「タビマエ」情報の強化）できるポータルサイトを構築し、観光客に対する利便性の向上を図る。（再掲）
- ・石見銀山遺跡と親和性の高いフランスからの来訪客を中心に、海外からの入込客数の増加を図るため、日本の文化理解や体験を好む欧米豪からの旅行者を満足させるような体験プログラムを組み込んだツアーを造成するほか、海外旅行博や旅行会社と連携して販売を促進し、さらなる誘客を図る。
- ・新北市立黄金博物館と石見銀山世界遺産センターとの国際友好館協定の締結を行い、相互に常設展示と「国際友好館」の掲示を相互で実施する。また、銀鉱山として平成29年に世界遺産に登録されたポーランドのタルノフスキェ・グルィ鉱山との連携を進め、webサイトの連携等、相互の情報発信に注力することにより「鉱山」に興味関心の高い外国人旅行者の取り込みを図る。
- ・国内外から関心、観光客が集まる「大阪・関西万博」は都会地からの誘客、インバウンド需要高まりの取り込みを図る絶好の機会であることから、これを契機に、関西エリアでの情報発信を強化するとともに、万博会場において専用ブースを設置し、万博関連で来訪する観光客に向けて石見銀山の魅力を発信し、石見銀山への誘客につなげる。

4-4. 文化の振興を起点とした、観光の振興、地域の活性化の好循環の創出

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」は、当時の精錬方法や工夫、銀生産から流通に至る全体像などを今に伝える歴史的な価値の高い産業遺産である。また、今なお人々が暮らすことで景観が守られ、遺跡と自然と人々の調和の総体が世界遺産としての価値を支えている。ただ、世界遺産登録時に町のキャパシティを超える影響を受けオーバーツーリズムとなったことで、「穏やかさと賑わいの両立」を謳った地域住民によるルールづくりも行われてきた。

本計画においては、現在、来訪者数の減少により失われつつある「賑わい」を取り戻すため、文化観光拠点施設の魅力向上や文化資源の理解を深める取組み実施により来訪者数の増加を図る。詳細な説明や事前知識がなければわかりにくく、世界遺産としての石見銀山の価値の「スゴさ」が伝わりにくいという課題も生じているため、誰もが容易に理解できる仕組みの構築を図ることで、満足度及び来訪意欲の向上につなげる。

また、広範囲に点在する文化資源の周遊の利便性を向上することで、さまざまな体験を提供し、来訪者の満足度を向上及び周遊や宿泊による滞在時間延長につなげる取組みを実施する。石見銀山の大森エリアには宿泊施設がほとんどなく、宿泊客を多く見込めないため、同じく世界遺産エリアにある温泉津地区や市内の宿泊地である三瓶地区への周遊を促すことにより宿泊者数の増加につなげる。さらには、宿泊以外の消費を増やすため、地域の魅力ある資源を活用した観光コンテンツ（体験プログラムや滞在・体験型ツアー商品）や土産物を造成、販売する。

公開活用施設は指定管理者制度を導入しているが必ずしも十分な収益が得られていない現状にあるため、計画の実施により収益増加を図ることで、施設の運用維持や新しいコンテンツ造成への資源確保に取り組みたい。あわせて、来訪者増加や滞在時間の延長等による地域経済の活性化民間事業者の収益増加を図ることで、事業や施設投資の拡大など、文化観光の推進に向けた様々な波及効果を発生させ、地域経済の好循環を生み出し、持続的・発展的な文化観光の推進を実現したい。

なお、本計画の実施に際しては、計画の推進協議会及び構成員に民間団体を含む「石見銀山遺跡とその文化的景観」世界遺産登録20周年記念事業実行委員会（令和6年7月2日発足）において課題を共有し、合意形成を行い

つつ諸事業を推進することにより、官民一体による取り組み体制の定着化を図ることで、行政のみならず地域や民間企業の協働による主体的で持続的な取り組みとする。

本計画の取組みを通じて、関係事業者を含めた地域全体が地域にある歴史文化資源の価値や保存の意義を再認識することができるとともに、文化観光推進に関する行政・事業者・地元等の連携強化が図られることで、さらなる事業の展開や適切で持続的な文化財保護につながると考えられる。

5. 目標

目標①：拠点施設への入場者の実数（課題１関連、取組強化事項１関連）

（目標値の設定の考え方及び把握方法）

<設定>

石見銀山への年間入込客数は、世界遺産登録年の平成１９年と翌年の平成２０年には年間８０万人であったが、完全なオーバーツーリズムで地元混乱と混雑を引き起こした。来訪者にとっても地元住民にとっても調和がとれ、持続的な来訪地として適切な入込客総数を年間４０万人とし、この入込総数に対して約半数となる公開施設（石見銀山世界遺産センター・龍源寺間歩・石見銀山資料館）への年間入込実数である２０万人とした。

<把握方法>

各施設の入込客実数により把握する。

年度	実績		目標				
	令和４年	令和５年	令和６年	令和７年	令和８年	令和９年	令和１０年
目標値	１３７千人	１６１千人	１７０千人	１８０千人	１９０千人	２００千人	２００千人
事業１－①： 石見銀山世界遺産センター 展示更新事業			基本構想並びに基本 設計	実施設計	更新事業実施	登録２０周年 一般公開開始	（公開継続）
事業１－②： いも代官ミュージアム（石 見銀山資料館）展示パネル 更新及びデジタルミュージ アム構築事業			企画検討	設計・制作	実証的見直し修正	完成	（公開継続）
事業１－③： 龍源寺間歩周辺魅力化事業			森林管理基本構想策 定	実施設計	現地整備	実証見直し 追加更新・公開	（公開継続）

事業2－②： 石見銀山及び周辺地域の来 訪客を対象とした観光動態 調査事業				調査実施	調査実施		
事業5－①： 石見銀山世界遺産センター 施設改修・設備更新事業				実施設計	施設改修、更新施工	登録20周年 一般公開開始	(公開継続)

目標②：来訪者の満足度（課題1，2，3，5関連、取組強化事項1，2，3，5関連） （目標値の設定の考え方及び把握方法） ＜設定＞ 歴史的資源の容易な理解の促進、周辺を含めた総合的環境整備の成果を測定する有効的な数値であるとする。大田市観光協会が毎年実施している「大田市観光動態調査」において、石見銀山遺跡に関連する施設をメインの観光地として設定している観光客の満足度について、4段階評価の最も高い項目である「満足」と回答する割合を上げることが目標とする。 ＜把握方法＞ 大田市観光協会による観光動態調査により把握する。							
年度	実績		目標				
	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年	令和8年	令和9年	令和10年
目標値	(未測定)	55.4%	57.4%	59.4%	61.4%	63.4%	65.4%
事業1－④： 石見銀山学習・体験プロ グラム開発事業				体制構築・試行	モニタリング実施・ 見直し修正	完成・ランディング	(継続)
事業1－⑤： 石見銀山遺跡デジタルマッ プ作成事業				設計・制作	実施・運用・修正	公開	(公開継続)

事業1－⑥： 外国語通訳による魅力発信 事業			地域おこし協力隊 1名配置	地域おこし協力隊 2名配置	地域おこし協力隊 2名配置	地域おこし協力隊 1名配置	
事業5－②： 史跡重点整備事業（最盛期 生産エリア 石銀集落跡・ 本谷地区）				実施設計	整備事業実施	登録20周年 一般公開開始	（公開継続）

目標③：大田市内観光消費額（課題2，3関連、取組強化事項2，3関連） （目標値の設定の考え方及び把握方法） ＜設定＞ 令和5年3月に策定した「大田市新観光振興計画改定版」において令和8年の観光消費額約50億円、年間4.3億円増加を目標としており、令和9年～10年についても同様の増加率で設定した。 ＜把握方法＞ 大田市観光協会による観光動態調査により把握する。							
年度	実績		目標				
	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年	令和8年	令和9年	令和10年
目標値	46.91 億円	37.59 億円	40.7億円	45億円	49.3億円	53.6億円	57.9億円
事業2－①： 主要観光地間シャトルバス 等運行事業				周遊システムの構築	シャトルバス等の実 証運行	シャトルバス等の本 運行	（運行継続）
事業2－③： 石見銀山ポータルサイト構 築事業				サイトの構築	運用開始	（運用継続）	（運用継続）

事業３－①： 体験・滞在型商品等の造成・販売促進事業				観光商品造成	観光商品造成、観光 旅行商品販売開始 (令和７年度造成 分)	観光旅行商品販売開 始（令和８年度造成 分）	(販売継続)
事業４－①： 石見銀山エリア周遊促進事業					デジタルサイネージ の設置	バスのラッピング のぼり旗設置	

目標④：大田市内外国人観光客入込数（課題４関連、取組強化事項４関連）							
（目標値の設定の考え方及び把握方法） <設定> コロナ禍前の外国人入込客数の３年間増加平均値を鑑み、施策を打たない場合の自然増は６００人とした。それに追加し、施策により年間１８０人（月１５人）の増を見込み、あわせて年間７８０人の増加とした。計画開始から１０年目となる令和１５年には、令和元年（コロナ前）の数字の２倍となる１１,０００人の外国人入込を目指したい。 <把握方法> 各施設の入込客実数により把握する。							
年度	実績		目標				
	令和元年	令和５年	令和６年	令和７年	令和８年	令和９年	令和１０年
目標値	５,５００人	３,２１１人	４,０００人	４,７８０人	５,５６０人	６,３４０人	７,１２０人
事業４－②： 大阪・関西万博を契機とした国内外観光客向け情報発信事業			情報発信	情報発信 ブースの設置	情報発信		

6. 目標の達成状況の評価

文化観光推進協議会において、各年度終了後に課題や成果などの実態を把握し、K P I 数値の推移及びその原因分析を踏まえ、取り組んだ事業と数値の変化の因果関係を再検証し、新たな課題への対応、向かうべき方向を議論し、必要な修正を行うことによりPDCAサイクルを回す。

7. 中核とする文化観光拠点施設

文化観光拠点施設名	石見銀山世界遺産センター
主要な文化資源	
鉱山である仙ノ山南麓に平成20年に整備された石見銀山の拠点施設である。来訪者の一次受け入れ、ガイドンス、展示、収蔵・体験学習施設を備え、調査研究と遺産保全のスタッフを配した石見銀山中核施設である。 展示は、多年にわたる発掘調査で出土品を中心に模型・映像・レプリカを配して遺産の価値を紹介している。 特筆すべき展示品に、遺跡出土としては世界的に稀有な例である灰吹銀とその未成品の銀鉛合金「貴鉛」の実物、「幻の染」と言われる「辻が花染丁子文道服」の再現品、石見銀山最大級の坑道大久保間歩の精緻なフルスケールレプリカがある。	
	
主要な文化資源についての解説・紹介の状況	
現状の取組	
【文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）】 現況の展示コンセプトは、石見銀山が世界遺産として登録された普遍的価値の根拠となる3つの価値基準を中心に紹介、解説している。第1展示室では「16世紀の世界経済に大きな影響を与えた遺産である（価値基準ii）」こと、第2展示室では「考古学的遺跡が良好にとどめられている（価値基準iii）」こと、第3展示室では継続して実施している調査研究の成果、そして第4展示室では「鉱山活動の及んだ土地利用の総体（価値基準v）」を紹介している。世界遺産としての石見銀山の価値基準の説明をコンセプトに構成されたためメッセージ性が低く、はじめて訪れる来訪者にとっては難解で、国外からの来訪者にとってはなおのこと世界遺産として、その「すごさ」が伝わりにくいという課題が生じている。 【情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）】 来館者が個人の端末でも検索等が行えるように、館内はフリーWi-Fiの環境を構築している。型式は古いものの液晶画面のタッチ形式で楽しむクイズシステム端末を展示室内4か所に配備している。 【外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）】 令和元・2年度に観光庁の多言語解説整備支援事業により支給された「わかりやすい英語解説文」から11言語に多言語化し、これらを展示室内に敷設したQRコードを読み取り端末に表示させるシステムを導入している。	
本計画における取組	
【文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）】 銀がどのように人類にとって重要であったのかを掘り下げつつ、「16世紀の世界経済に与えた影響」という大きな歴史的背景を強調し、その大量の銀が小さな坑道から掘り出され、なおかつ小規模な自立的経営によって産み出された営みであったという石見銀山の価値の本質を伝えることを通有のテーマで展示を再構築する。さらに各構成資産が、どのように機能することで世界に影響したのかの説示に加え、往時の民家や武家住宅が活用されつつ存続するという他に類を見ない鉱山町の文化的景観の価値を強調する。 【情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）】 「石見銀山遺跡とその文化的景観」の価値や歴史的意義をわかりやすく伝えるため、ICT技術を用いた説示を強化する。また、車椅子利用者や低身長者にとって読みづらかった展示ボードを一新し、若年層の興味関心が高まるようデジタル技術を活用しながら展示更新を行う。 【外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）】 調査研究の展示を行う第3展示室への動線を改良し、現在も継続して実施している調査研究の成果である、国内外鉱山との比較研究や、国際友好館の紹介を中心とした連携の情報提供を、わかりやすい英語解説文を元	

に多言語化して掲示する。なお多言語化に際しては観光庁指針「How to 多言語解説文整備」の趣旨に沿って取り組む。

施行規則第1条第2項第1号の文化観光推進事業者との連携

現状の取組

【文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築】

大田市及び指定管理者は、(一社)大田市観光協会(地域DMO)と連携しながら観光誘客を図っている。また、大田市観光協会及び大田市が事務局となり、多様な観光関連事業者が集まる大田市観光戦略会議では、大田市の観光についての議論や情報交換を行っている。

【文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析】

大田市では、大田市観光入込客数調査、大田市宿泊客数調査を実施している。また、(一社)大田市観光協会(地域DMO)において、観光客への聞き取りによる大田市観光動態調査を実施し、日帰り・宿泊の別、訪問回数、観光消費額、満足度等のデータを収集するほか、周遊ルート等の分析も行っている。

島根県においても、島根観光動態調査を実施しており、島根県全域の観光動向のデータ収集・分析を行っている。また、首都圏(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)在住者を対象に、インターネット回答によるしほの観光認知度調査も実施しており、島根県の認知度・イメージ、島根県への旅行実績、観光意欲、情報接触度等のデータ収集・分析も行っている。

上記の調査結果等により、島根県や大田市、石見銀山世界遺産センターを取り巻く状況を把握している。

【文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びKPIの設定・PDCAサイクルの確立】

大田市及び島根県、(一社)大田市観光協会(地域DMO)、大田商工会議所、銀の道商工会の官民で構成する文化観光推進協議会を組織し、地域計画(方針、KPIの設定)の策定等を行う。

本計画における取組

【文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築】

大田市は(一社)大田市観光協会(地域DMO)と連携しながら、地域計画における事業を実施し、観光誘客を図る。また、大田市観光協会及び大田市が事務局となり、多様な観光関連事業者が集まる大田市観光戦略会議でも積極的に意見聴取、情報提供を行い、事業の内容がより良くなるように努める。

大田市観光協会(地域DMO)においては、大田市と連携するとともに、山陰インバウンド機構及び島根県観光連盟との広域連携を行い、大田市における観光データの収集・整理・分析の実施や観光サイトの充実を図る。また、各地の強みを活かした文化観光に関する体験プランや旅行商品の造成やマーケティングに関して中心的な役割を担う。

山陰インバウンド機構(広域連携DMO)には、県をまたいだ広域な連携の中で、インバウンドや観光商品造成などについて助言・協力をいただくとともに、島根県観光連盟(地域連携DMO)には、市町をまたいだ県内連携の中で、誘客や観光商品造成などについて助言・協力をいただく。

【文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析】

文化観光推進協議会で、大田市、(一社)大田市観光協会(地域DMO)、島根県等の持つ各種データを収集し、事業効果の分析、本計画の進捗管理や評価等に活かす。

【文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びKPIの設定・PDCAサイクルの確立】

文化観光推進協議会が事業の方針策定、KPIの設定、本計画の進捗管理や評価を行い、評価結果に基づき、各事業の実施主体が改善策等の検討を行い、事業に反映する。

施行規則第1条第2項第2号の文化観光推進事業者との連携

現状の取組

【文化観光を推進するための交通アクセスの充実や商店街を含めたにぎわいづくりなど、文化観光の推進に関する事業の企画・実施】

大田市と島根県では、石見銀山世界遺産センターでの展示について協力し、企画展等の実施を行っている。大田市文化財担当者、島根県文化財担当者、指定管理者(石見交通)で、毎月、月例会を開催しており、その中で企画展等の企画検討を行っている。展示更新の実施においても、大田市文化財担当者、島根県文化財担当者、指定管理者(石見交通)で、展示更新ワーキンググループを立ち上げ、展示更新に向けて議論を行っている。(ワーキンググループ会議は、令和5年11月に第1回を開催し、現在、9回開催している)

またバリアフリー対応も課題であるため、大田市身体障がい者協会へ現地視察の協力依頼を行っており、身体障がい（車椅子利用者）、視覚障がい、聴覚障がいのそれぞれの分野での視察協力の承諾をいただいている。

令和6年3月より、石見銀山世界遺産センター、重要文化財熊谷家住宅、龍源寺間歩の3施設の周遊促進のため、観光スポットカード「ロケットカード」で初となる世界遺産シリーズのスペシャルロケットカードを作成し、3施設全体での入場者数増加のための連携も行われている。重要文化財熊谷家住宅はNPO石見銀山資料館が指定管理を受けている施設であり、本計画の3つの文化観光拠点施設の管理者が連携した取り組みとなっている。

本計画における取組

【文化観光を推進するための交通アクセスの充実や商店街を含めたにぎわいづくりなど、文化観光の推進に関する事業の企画・実施】

大田市と島根県では、石見銀山世界遺産センターでの展示について協力して運営しており、企画展等の実施を行っている。展示更新の実施においても、大田市文化財担当者、島根県文化財担当者、指定管理者（石見交通）で、展示更新ワーキンググループを立ち上げ、展示更新に向けて議論を行っている。引き続き、ワーキンググループで議論を重ねながら、実施していく。（ワーキンググループ会議は、令和5年11月10日に第1回を開催し、現在、9回開催している）

バリアフリー対応として、大田市身体障がい者協会による現地視察を実施し、展示更新、施設改修の参考とし、進めていく。

また、石見銀山世界遺産センターのエントランスゾーンを活用して物産・物販等の推進事業者の情報発信拠点として展開する。さらに、パークアンドライドの起点という利点を活かし地域産品や試行開発された土産物の販売を行う。

あわせて、他の文化観光拠点施設と連携し、相互送客等の実施による観光誘客に取り組むとともに、地元交通事業者との連携により、石見銀山世界遺産センターをハブとした2次交通の整備を行い、市内・県内の各観光地や宿泊地と石見銀山とのアクセスの向上を図る。

文化観光拠点施設名	いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）
-----------	---------------------

主要な文化資源

代官所跡地に所在するミュージアム。建物は、明治35年に邇摩郡役所として建設され、明治40年には皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）による山陰道行啓の昼餐所として利用される。戦後は女学校、中学校、保育園として活用され、昭和51年、市の施設を譲り受けて地元運営により、史資料を収蔵展示する石見銀山資料館として開館した。平成30年にはNPO法人化し、令和3年には愛称を「いも代官ミュージアム」とし、石見銀山の紹介のみならず地域文化の発展及び研究の振興に寄与している。代官所の遺構としては1811年建築の門長屋が現存する。（収蔵資料約1,000点）



主要な文化資源についての解説・紹介の状況

現状の取組

【文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）】

江戸幕府直轄の石見銀山御料の拠点となった歴史を解説するため、パネルや史資料等の展示を行っている。「歴史」、「鉱山」、「文化」、「鉱物」の4つのコーナーにわけて、展示を行っている。

<いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）展示コーナー概要>

（歴史コーナー）

江戸幕府直轄の石見銀山御料の拠点となった歴史を、「葵紋小旗」「元文丁銀」「井戸神社扁額」等の資料をもとに、江戸幕府の石見銀山支配の諸政策について展示解説を行っている。

（鉱山コーナー）

「採掘道具」「坑道図」「福面之図」等の資料をもとに、採鉱から製錬に至る銀の生産過程や、鉱山の経営や技術について展示解説を行っている

（文化コーナー）

「銀山旧記」「銀山町絵図」「大久保長安寄進能面」等により、銀山町や大森町に暮らす人々に焦点をあ

て、当時の文化や信仰について展示解説を行っている。

(鉱物コーナー)

石見銀山を形成する2つの鉱床である福石鉱床と永久鉱床の鉱石標本の展示のほか、全国各地の鉱物標本の展示も行なうなど、石見銀山で採取された銀鉱石、銅鉱石をはじめ、全国各地の鉱山の特徴的な鉱物の展示解説を行っている。

【情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）】

現在、展示で活用しているデジタル技術はなし。

【外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）】

現在、日本語のみでの展示となっている。

(公式ホームページは英語、韓国語、中国語（簡体・繁体）に多言語化している。)

観光庁より支給されたわかりやすい英語文をQRコードで読み取ることで多言語表示するサインを2箇所設置している。

本計画における取組

【文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）】

石見銀山の歴史文化を物語るうえで欠くことのできない「重要資料の展示館」という役割を持つ、いも代官ミュージアムで、その豊富な収蔵資料をわかりやすく紹介するため、展示パネルの改修を行うとともに、バーチャル技術も補助的に活用することで価値理解が深まるようにする。

【情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）】

動画の放映や、2次元コードからのリンクでWEB上の解説ページを閲覧できるようにする。

【外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）】

欧州諸国からの来訪客の増加も想定し、展示解説やHPについては、わかりやすい解説文とともに多言語化を推進する。なお多言語化に際しては観光庁指針「How to 多言語解説文整備」の趣旨に沿って取り組む。また、企画展においても重要な部分の多言語解説添付や資料配布、2次元コードからのリンクでWEB上の多言語化された解説ページが閲覧できるようにする。

施行規則第1条第2項第1号の文化観光推進事業者との連携

現状の取組

【文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築】

施設設置者は、(一社)大田市観光協会(地域DMO)と連携しながら観光誘客を図っている。また、大田市観光協会及び大田市が事務局となり、多様な観光関連事業者が集まる大田市観光戦略会議では、大田市の観光についての議論や情報交換を行っている。

【文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析】

大田市では、大田市観光入込客数調査、大田市宿泊客数調査を実施している。また、(一社)大田市観光協会(地域DMO)において、観光客への聞き取りによる大田市観光動態調査を実施し、日帰り・宿泊の別、訪問回数、観光消費額、満足度等のデータを収集するほか、周遊ルート等の分析も行っている。

島根県においても、島根観光動態調査を実施しており、島根県全域の観光動向のデータ収集・分析を行っている。また、首都圏(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)在住者を対象に、インターネット回答によるしほの観光認知度調査も実施しており、島根県の認知度・イメージ、島根県への旅行実績、観光意欲、情報接触度等のデータ収集・分析も行っている。

上記の調査結果等により、島根県や大田市、いも代官ミュージアム(石見銀山資料館)を取り巻く状況を把握している。

【文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びKPIの設定・PDCAサイクルの確立】

大田市及び島根県、(一社)大田市観光協会(地域DMO)、大田商工会議所、銀の道商工会の官民で構成する文化観光推進協議会を組織し、地域計画(方針、KPIの設定)の策定等を行う。

本計画における取組

【文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築】

大田市は（一社）大田市観光協会（地域DMO）と連携しながら、地域計画における事業を実施し、観光誘客を図る。また、大田市観光協会及び大田市が事務局となり、多様な観光関連事業者が集まる大田市観光戦略会議でも積極的に意見聴取、情報提供を行い、事業の内容がより良くなるように努める。

大田市観光協会（地域DMO）においては、大田市と連携するとともに、山陰インバウンド機構及び島根県観光連盟との広域連携を行い、大田市における観光データの収集・整理・分析の実施や観光サイトの充実を図る。また、各地の強みを活かした文化観光に関する体験プランや旅行商品の造成やマーケティングに関して中心的な役割を担う。

山陰インバウンド機構（広域連携DMO）には、県をまたいだ広域な連携の中で、インバウンドや観光商品造成などについて助言・協力をいただくとともに、島根県観光連盟（地域連携DMO）には、市町をまたいだ県内連携の中で、誘客や観光商品造成などについて助言・協力をいただく。

【文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析】

文化観光推進協議会で、大田市、（一社）大田市観光協会（地域DMO）、島根県等の持つ各種データを収集し、事業効果の分析、本計画の進捗管理や評価等に活かす。

【文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びK P I の設定・PDCAサイクルの確立】

文化観光推進協議会が事業の方針策定、K P I の設定、本計画の進捗管理や評価を行い、評価結果に基づき、各事業の実施主体が改善策等の検討を行い、事業に反映する。

施行規則第1条第2項第2号の文化観光推進事業者との連携

現状の取組

【文化観光を推進するための交通アクセスの充実や商店街を含めたにぎわいづくりなど、文化観光の推進に関する事業の企画・実施】

令和6年3月より、石見銀山世界遺産センター、重要文化財熊谷家住宅、龍源寺間歩の3施設の周遊促進のため、観光スポットカード「ロゲットカード」で初となる世界遺産シリーズのスペシャルロゲットカードを作成し、3施設全体での入場者数増加のための連携も行われている。重要文化財熊谷家住宅はいも代官ミュージアム施設設置者である、NPO法人石見銀山資料館が指定管理を受けている施設であり、本計画の3つの文化観光拠点施設の管理者が連携した取り組みとなっている。

また、いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）には、バーチャル技術を活用したミュージアム体験を主要業務とするV i r t u a l i o n株式会社（東京都）の「世界遺産石見銀山ミュージアム支店」が設置されている。

本計画における取組

【文化観光を推進するための交通アクセスの充実や商店街を含めたにぎわいづくりなど、文化観光の推進に関する事業の企画・実施】

バーチャル技術を活用したミュージアム体験を業務とするV i r t u a l i o n株式会社との連携により、バーチャル技術を活用した展示に取り組む。

また、他の文化観光拠点施設と連携し、相互送客等の実施による観光誘客に取り組むとともに、地元交通事業者との連携により、石見銀山世界遺産センターをハブとした2次交通の整備を行い、市内・県内の各観光地や宿泊地と石見銀山とのアクセスの向上を図る。

あわせて、来訪拠点である龍源寺間歩と石見銀山資料館周辺では、事業者と連携し、飲食の提供を主体としつつ交流拠点として「賑わいの創出」を図る。

文化観光拠点施設名	龍源寺間歩
主要な文化資源	
江戸時代前期には開かれていた代官所直営の坑道で、明治時代も引き続き機能していた。平成元年から通り抜け公開を実施。現在、石見銀山では唯一通年での常時公開を行い、往時の鉱山技術をうかがい知ることのできる人気スポットとなっている。坑内には主坑道から左右に鉱脈に沿って掘り進んだ痕跡をよく留め、坑外では近年発掘調査によって確認された大規模な銀吹所（製錬所）跡や露頭掘り群、さらには修復を終えた鉱山の守り神を祀る神社も位置しており、来訪者にとって価値理解の促進と満足度の向上には欠くことのできない重要な拠点である。	
	
主要な文化資源についての解説・紹介の状況	
現状の取組	
【文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）】 坑内の見学ポイントと坑道の入口、出口に解説板を設置し、出口のために開削された坑内通路に電照による説明板を設け、理解の促進を図っている。 【情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）】 令和5年に一般社団法人石見銀山みらいコンソーシアムが指定管理者となっており、専用ホームページを開設したほか、SNSによる発信も行っている。 【外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）】 多言語対応は、観光庁の指針に沿って実施している。令和元・2年度に観光庁の多言語解説整備支援事業により支給された解説文を、坑道出入口の解説板に標記したQRコードを読み取ることで11言語を表記する多言語解説システムを運用している。	
本計画における取組	
【文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）】 遺構と一体となった周辺の植生の管理を進めるとともに、石見銀山の特徴の一つである「自然と共生した鉱山活動」がどのようなものであったかを伝えるため、間歩坑道の解説に加えて、鉱山を神聖視して設けられた周辺部の「山神社」や「太鼓堂」、さらには世界経済に影響を与えていた16世紀の遺構や露天掘りなどについて、発掘調査の成果を反映しつつ、解説テキストや体験プログラムコンテンツの作成を行う。あわせて、それらの魅力が伝わるよう、現地ガイドの磨き上げを行うことで、より旅行者の理解が深まる整備を行う。 【情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）】 出口に至る坑内通路のコンクリート壁面を活用し、プロジェクションマッピングや拡張現実の技術で動きのある坑内作業の具体像や、石見銀山を題材に直木賞を受賞した小説「しろがねの葉」の情景を体感できる音響や映像の設備を設置し、現地でしか体感することのできない「感動的価値」を高め、満足度の向上を図る。 【外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）】 令和6年度にあらためて観光庁による多言語解説整備支援事業により、現地の説示に係る「わかりやすい英語文」を制作しつつあり、今後はさらに多言語に展開する。	
施行規則第1条第2項第1号の文化観光推進事業者との連携	
現状の取組	
【文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築】 大田市及び指定管理者は、（一社）大田市観光協会（地域DMO）と連携しながら観光誘客を図っている。また、大田市観光協会及び大田市が事務局となり、多様な観光関連事業者が集まる大田市観光戦略会議では、大田市の観光についての議論や情報交換を行っている。 【文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析】	

大田市では、大田市観光入込客数調査、大田市宿泊客数調査を実施している。また、(一社)大田市観光協会(地域DMO)において、観光客への聞き取りによる大田市観光動態調査を実施し、日帰り・宿泊の別、訪問回数、観光消費額、満足度等のデータを収集するほか、周遊ルート等の分析も行っている。

島根県においても、島根観光動態調査を実施しており、島根県全域の観光動向のデータ収集・分析を行っている。また、首都圏(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)在住者を対象に、インターネット回答によるしまねの観光認知度調査も実施しており、島根県の認知度・イメージ、島根県への旅行実績、観光意欲、情報接触度等のデータ収集・分析も行っている。

上記の調査結果等により、島根県や大田市、龍源寺間歩を取り巻く状況を把握している。

【文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びK P I の設定・PDCAサイクルの確立】

大田市及び島根県、(一社)大田市観光協会(地域DMO)、大田商工会議所、銀の道商工会の官民で構成する文化観光推進協議会を組織し、地域計画(方針、K P I の設定)の策定等を行う。

本計画における取組

【文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築】

大田市は(一社)大田市観光協会(地域DMO)と連携しながら、地域計画における事業を実施し、観光誘客を図る。また、大田市観光協会及び大田市が事務局となり、多様な観光関連事業者が集まる大田市観光戦略会議でも積極的に意見聴取、情報提供を行い、事業の内容がより良くなるように努める。

大田市観光協会(地域DMO)においては、大田市と連携するとともに、山陰インバウンド機構及び島根県観光連盟との広域連携を行い、大田市における観光データの収集・整理・分析の実施や観光サイトの充実を図る。また、各地の強みを活かした文化観光に関する体験プランや旅行商品の造成やマーケティングに関して中心的な役割を担う。

山陰インバウンド機構(広域連携DMO)には、県をまたいだ広域な連携の中で、インバウンドや観光商品造成などについて助言・協力をいただくとともに、島根県観光連盟(地域連携DMO)には、市町をまたいだ県内連携の中で、誘客や観光商品造成などについて助言・協力をいただく。

【文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析】

文化観光推進協議会で、大田市、(一社)大田市観光協会(地域DMO)、島根県等の持つ各種データを収集し、事業効果の分析、本計画の進捗管理や評価等に活かす。

【文化観光の推進に関する事業の方針の策定及びK P I の設定・PDCAサイクルの確立】

文化観光推進協議会が事業の方針策定、K P I の設定、本計画の進捗管理や評価を行い、評価結果に基づき、各事業の実施主体が改善策等の検討を行い、事業に反映する。

施行規則第1条第2項第2号の文化観光推進事業者との連携

現状の取組

【文化観光を推進するための交通アクセスの充実や商店街を含めたにぎわいづくりなど、文化観光の推進に関する事業の企画・実施】

令和6年3月より、石見銀山世界遺産センター、重要文化財熊谷家住宅、龍源寺間歩の3施設の周遊促進のため、観光スポットカード「ロゲットカード」で初となる世界遺産シリーズのスペシャルロゲットカードを作成し、3施設全体での入場者数増加のための連携も行われている。重要文化財熊谷家住宅はいも代官ミュージアム施設設置者である、NPO法人石見銀山資料館が指定管理を受けている施設であり、本計画の3つの文化観光拠点施設の管理者が連携した取り組みとなっている。

本計画における取組

【文化観光を推進するための交通アクセスの充実や商店街を含めたにぎわいづくりなど、文化観光の推進に関する事業の企画・実施】

他の文化観光拠点施設と連携し、相互送客等の実施による観光誘客に取り組むとともに、地元交通事業者との連携により、石見銀山世界遺産センターをハブとした2次交通の整備を行い、市内・県内の各観光地や宿泊地と石見銀山とのアクセスの向上を図る。

あわせて、来訪拠点である龍源寺間歩と石見銀山資料館周辺では、事業者と連携し、飲食の提供を主体としつつ交流拠点として「賑わいの創出」を図る。

8. 地域文化観光推進事業

8-1. 事業の内容

8-1-1. 文化資源の総合的な魅力の増進に関する事業

(事業番号 1-①)

事業名	石見銀山世界遺産センター展示更新事業
事業内容	令和9年7月に迎える石見銀山遺跡の世界遺産登録20周年・石見銀山発見500年に向け、石見銀山世界遺産センターの展示機能を強化するための展示更新を実施することで、来訪者の満足度を向上させ、更なる普及啓発を推進することを目的に展示更新を行う。 石見銀山世界遺産センターの展示は、世界遺産としての石見銀山の価値基準の説明をコンセプトに構成されたため、メッセージ性が低く、はじめて訪れる来訪者にとっては難解で、国外からの来訪者にとってはなおのこと世界遺産として、その「スゴさ」が伝わりにくいという課題が生じている。また開館からおよそ20年を経過し、その後の調査研究成果の反映はもとより、近年増加している外国人旅行者や教育旅行、若年層への解説等について、必ずしも十分でなく、バリアフリー化への対応も不十分である。 今回の展示更新では、世界遺産としての石見銀山の価値が伝わり、また快適に鑑賞できるように展示更新を行う。 なお、解説の多言語化にあたっては観光庁指針「How to 多言語解説文整備」に沿って行う。 (主な取り組み) ・第1展示室では、「世界との繋がり／価値基準ii、石見銀山の発見」をテーマに、世界史に与えたインパクトを強調し、世界遺産としての価値を理解するための内容とする。また「銀」そのものの価値と魅力を鮮明化させる展示内容とする。あわせて石見銀山発見に関する展示の充実を図る。 ・第2展示室では、「石見銀山遺跡の歴史、最盛期の石見銀山、銀生産の過程／価値基準iii, v」をテーマに、「分かりやすい石見銀山」に資する、展示テーマを明確に示す空間構成と動線設定を行う。また従来の展示を活かしつつ新たな展示手法の導入を検討し、実施する。 ・第3展示室では、「近代以降の石見銀山と国内・海外鉱山」をテーマに、近代の石見銀山の展開を解説する。石見銀山と関連のある海外鉱山・国内鉱山を紹介する。 ・第4展示室では、「調査研究の進む石見銀山」をテーマに、調査研究成果の速報や季節に相応しい展示を行う。 ・企画展示室、情報ギャラリー（無料エリア）では、「価値の継承・次世代の育成」をテーマに、「鉱山」を知らない子ども達が「鉱山」の魅力を知る仕掛け（動画・体験型仕器等）をつくり、次世代を担う子どもたちの学びの場、石見銀山の価値の継承の場とする。また鉱山や間歩を感じられる、座って休めるような空間構成とする。
実施主体	大田市
実施時期	令和6年度～令和9年度
継続見込	入館料収入および自己資金により継続
アウトプット目標	石見銀山世界遺産センター展示室の入館者数の増加、石見銀山世界遺産センター展示室入館者の満足度の向上
必要資金調達方法	45百万円 内訳：30百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、15百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

(事業番号 1-②)

事業名	いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）展示パネル更新及びデジタルミュージアム構築事業
事業内容	現地の展示をわかりやすく紹介するため、展示パネルを改修するとともに、展示しきれない豊富な資料については、収蔵資料のデジタル化を行い、バーチャル技術を導入した展示・解説の構築及び運用を実施する。

	バーチャルミュージアムは「タビマエ」の情報発信での活用も検討しており、訪れる前に世界遺産としての石見銀山の価値を学び、現地に来訪した際の理解度を上昇させることで、入館者の展示への満足度の向上にもつながる取り組みとする。 なお、解説の多言語化にあたっては観光庁指針「How to 多言語解説文整備」に沿って行う。
実施主体	大田市、NPO法人石見銀山資料館
実施時期	令和6年度～令和10年度
継続見込	入館料収入により継続
アウトプット目標	いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）の入館者数の増加、いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）入館者の満足度の向上、いも代官ミュージアム（石見銀山資料館）デジタルミュージアムの訪問者数
必要資金 調達方法	30百万円 内訳：20百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、10百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

（事業番号1－③）

事業名	龍源寺間歩周辺魅力化事業
事業内容	相当期間、展示解説機能が更新されていない公開坑道（龍源寺間歩）について、解説パネル等の更新を行うとともに、デジタル技術を活用した展示解説設備の導入を行う。 また、外国人観光客にも理解ができるよう、観光庁指針「How to 多言語解説文整備」に沿って多言語化を実施する。 （主な取組内容） ・採掘から製錬にいたる工程が描かれた鉱山絵巻のデジタル展示 ・当時の採掘環境や地下坑道の理解を深めるVRコンテンツ作成 ・外国人向けにポイントを絞った解説の実施 ・植生管理計画（仮）に基づく、樹木間伐、植生管理の実施
実施主体	大田市
実施時期	令和6年度～令和9年度
継続見込	入館料収入および自己資金により継続
アウトプット目標	デジタルコンテンツの制作・展示数、来訪者数の増加、満足度の向上
必要資金 調達方法	20百万円 内訳：13百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、7百万円（自己資金） ※文化庁の地域文化財総合活用推進事業（世界文化遺産）補助金、文化財多言語解説整備補助金等の活用も検討する ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

（事業番号1－④）

事業名	石見銀山学習・体験プログラム開発事業
事業内容	鉱山が身近な存在ではなくなった現在において、鉱山における採掘から製錬にかかる一連の作業が、一般の方にはイメージしにくいものとなっている。その様子や意義を、より明確に、分かりやすく伝えるため、案内の強化を図るとともに、往時の作業を疑似体験してもらうことで、人力作業を主とした鉱山労働への理解を進める。 具体例として、カマスに入れて運んだ鉱石運搬の体験、比重選鉱により砂中から金属を取り出す体験、銀鉛合金を加熱し、銀を取り出す体験がある。このほか、子ども向けに、坑内で「嗅ぐ」「聴く」「触る」を体験するネイチャー（フィールド）ビンゴ等を行い、ノベルティを渡すプログラムを企画検討し、整備することで来訪者の理解度・満足度の向上につなげる。
実施主体	大田市、島根県

実施時期	令和7～令和8年
継続見込	自己資金により継続
アウトプット 目標	体験プログラム実施回数（参加者）、満足度の向上
必要資金 調達方法	5百万円 内訳：5百万円（自己資金）

（事業番号1－⑤）

事業名	石見銀山遺跡デジタルマップ作成事業
事業内容	景観保全のため、不十分な案内看板や表示について、町並みの価値を観光客によりわかりやすく伝えかつ充実した案内を実施するため、大森地区の江戸時代の町並みの古地図をデジタルデータ化し、現在の地図と重ねあわせたデジタルマップを作成する。 出来上がったマップのQRコードを案内所や施設、パンフレット等に掲載し、観光客の利用を促し、文化財に親しむ機会を増やすとともに、現地ガイドが観光客に当時の様子を伝える際にも活用することで、より深く石見銀山の面白さや魅力を伝えていく。
実施主体	大田市
実施時期	令和7年度～令和10年度
継続見込	自己資金により継続
アウトプット 目標	デジタルマップ利用者数、観光入込客数の増加
必要資金 調達方法	3.2百万円 内訳：2.2百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、1百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

（事業番号1－⑥）

事業名	外国語通訳による魅力発信事業
事業内容	インバウンド需要が高まる中、海外からの来訪者に石見銀山遺跡の魅力とその価値を的確に伝えることが必要であることから、外国語通訳ガイドを地域おこし協力隊として、令和6年度から1名、令和7年度から1名の合計2名を任用する予定である。実際のガイド活動の支援やガイド講習会の開催を通して、仲間づくり、ネットワークづくりを行い、世界遺産登録20周年・石見銀山発見500年を迎える令和9年には、10名程度が加入する通訳ガイドの会を発足させ、現地における有料ガイドによるインバウンド対応を開始する。
実施主体	大田市
実施時期	令和6年度～令和9年度
継続見込	今後組織化する外国語ガイド組織のガイド収入により継続
アウトプット 目標	外国人観光客入込客数の増加、外国語通訳ガイドのガイド数、外国人観光客の満足度の向上
必要資金 調達方法	28百万円 内訳：28百万円（自己資金） ※地域おこし協力隊制度を活用

8-1-2. 地域内を移動する国内外からの観光旅客の移動の利便の増進その他の地域における文化観光に関する利便の増進に関する事業

（事業番号2－①）

事業名	主要観光地間シャトルバス等運行事業
事業内容	石見銀山（大森）に訪れた観光客を同じく世界遺産エリアに位置する温泉津地区への周遊を促すため、二次交通の運行導入を検討する。あわせて、大森には宿泊施設が少ないため、同市内の三瓶地区や温泉津地区にある宿泊施設への移動をしやすいことで滞在時間延長を図る。 併せて、シャトルバス等運行のPRを強化することで、利用促進を図る。 ※令和7年度中の周遊システム構築に向け、現在、交通事業者との具体的な内容についての協議を実施している
実施主体	大田市

実施時期	令和7年度～令和10年度
継続見込	シャトルバスの収益および自己資金により継続
アウトプット 目標	シャトルバス等利用者数、大田市内宿泊者数の増加
必要資金 調達方法	31百万円 内訳：20.7百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、10.3百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

（事業番号2－②）

事業名	石見銀山及び周辺地域の来訪客を対象とした観光動態調査事業
事業内容	令和7年度中に山陰道「出雲-多伎間」が開通することにより、大田市が全国の高速道路網と繋がることとなる。また、インバウンドについてはコロナ禍明け以降、市場の急速な回復と高まりを見せていることから、今後数年のうちに石見銀山における観光動態が変化することが予想される。 これらの要素を取り逃すことなく、石見銀山世界遺産登録20周年を迎える令和9年度、さらにはその先も継続して観光客を取り入れるきっかけとするため、令和7年からの2年間で重点期間として、石見銀山を中心とする大田市に来訪した旅行客の観光動態調査や旅行の嗜好調査を実施する。 これにより観光客のニーズや流れをより詳細にとらえるデータを収集・分析し、受入環境の向上や改善を実施し観光施策に反映することで、観光客の満足度向上を図る。
実施主体	大田市、島根県
実施時期	令和7年度～令和8年度
継続見込	必要に応じて、令和9年以降も自己資金により継続を検討
アウトプット 目標	サンプル数
必要資金 調達方法	6百万円 内訳：4百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、2百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

（事業番号2－③）

事業名	石見銀山ポータルサイト構築事業
事業内容	大田市DMOの観光サイトに、観光動態調査の結果を反映したポータルサイトを構築する。旅行客の嗜好や行動形態に基づいて、石見銀山及び周辺地域の情報を提供することに加え、宿泊、交通アクセス（二次交通含む）、飲食、観光施設、アクティビティ等の情報発信・モデルプランの提供・旅行商品の紹介などが行えるサイトを構築する。
実施主体	大田市、島根県、（一社）大田市観光協会
実施時期	令和7年度
継続見込	自己資金により継続
アウトプット 目標	WEBセッション（訪問）数
必要資金 調達方法	7百万円 内訳：4.7百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、2.3百万円（自己資金（大田市・島根県）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

8-1-3. 地域における文化観光拠点施設その他の文化資源保存活用施設と飲食店、販売施設、宿泊施設その他の国内外からの観光旅客の利便に供する施設との連携の促進に関する事業

(事業番号3-①)

事業名	体験・滞在型商品等の造成・販売促進事業
事業内容	大田市観光協会の地域DMOとしての役割における受け地づくりチームの活動と連携し、各地域にある文化的に価値のある魅力的な観光資源※を活用した体験プランや旅行商品の造成を行い、大田市観光協会の持つ旅行業代理業やOTA登録の取り組みを活用し、販売促進（販路開拓）を実施する。 ※「窯元と作る手びねり体験」「温泉津の地酒付き石見神楽鑑賞」「石見神楽面の絵付け体験」「福光石採石場見学&石像彫師と福光石彫刻体験ツアー」など
実施主体	大田市、(一社)大田市観光協会
実施時期	令和7年度～令和9年度
継続見込	民間事業者で旅行商品として販売継続
アウトプット目標	旅行商品販売数、観光入込客数の増加、宿泊者数の増加
必要資金調達方法	6百万円 内訳：4百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁））、2百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

8-1-4. 国内外における地域の宣伝に関する事業

(事業番号4-①)

事業名	石見銀山エリア周遊促進事業
事業内容	JR大田市駅に到着した旅行者への情報提供のため、多言語対応の屋外デジタルサイネージ（7.4㎡程度）を設置して、現地への流入を促す。 共通のデザインで、大田市内の路線バス（5台程度）のラッピング、タクシー（50台程度）のデザインステッカー貼り付けを行い、観光客への石見銀山の認知度向上を図る。 石見銀山のポータルサイト2次元コード入りの石見銀山ののぼり旗を制作し、JR大田市駅、大田市内のバス停留所、観光施設、文化施設、商業施設、宿泊施設等に掲出し、認知度の向上やポータルサイトへの流入を促す。
実施主体	大田市、島根県
実施時期	令和8年度～令和9年度
継続見込	デジタルサイネージは掲載情報を更新しながら自己資金により継続
アウトプット目標	実施件数、利用者数
必要資金調達方法	10百万円 内訳：10百万円（自己資金）

(事業番号4-②)

事業名	大阪・関西万博を契機とした国内外観光客向け情報発信事業
事業内容	国内外から関心、観光客が集まる「大阪・関西万博」を契機とし、石見銀山遺跡や周辺の文化観光資源を核とした情報発信を行うことで、地域の認知度向上と誘客促進に繋がる事業を展開する。 ①関西エリアに訪れる外国人旅行者をターゲットとした情報発信事業 ・観光関連施設などでのリアルプロモーション等 ②大阪・関西万博会場ブースでの情報発信事業 ・県の運営するブース内で、大森町の暮らしや生業をテーマとした展示を設置 ③大阪情報発信拠点(KITE大阪・群言堂)での情報発信事業 ・大森町で事業を展開する事業所のブランド力を活用し、地域の魅力を情報発信
実施主体	島根県、(一社)大田市観光協会
実施時期	令和6年度～令和8年度
継続見込	必要に応じ自主財源により継続
アウトプット	大田市観光入込客延数の増加、大田市宿泊客延べ数の増加

目標	
必要資金 調達方法	9 百万円 内訳：6 百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）、3 百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する
8-1-5. 1. ～4. の事業に必要な施設又は設備の整備に関する事業	
(事業番号 5-①)	
事業名	石見銀山世界遺産センター施設改修・設備更新事業
事業内容	石見銀山世界遺産センターの展示機能を強化するための展示更新を実施することで、来訪者の満足度を向上させ、更なる普及啓発を推進することを目的に展示更新を行うこととしており、その展示更新にあわせて、施設改修・設備更新を行う。 展示機能を維持するために必要不可欠な空調機器、照明機器の更新等や、バリアフリー化への対応として、思いやり駐車場の設置等を行う。 ※事業番号 1-①に関連する整備事業
実施主体	大田市
実施時期	令和 7 年度～令和 9 年度
継続見込	入館料収入および自己資金により継続
アウトプット 目標	石見銀山世界遺産センター展示室の入館者数の増加、石見銀山世界遺産センター展示室入館者の満足度の向上
必要資金 調達方法	4 5 百万円 内訳：3 0 百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）、1 5 百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する
(事業番号 5-②)	
事業名	史跡重点整備事業（最盛期生産エリア 石銀集落跡・本谷地区）
事業内容	世界遺産センターで世界遺産としての価値や石見銀山における銀生産の概要を理解した観光客が、さらに石見銀山の価値についての理解を深めることができる場所として、16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて採掘がおこなわれたエリアの整備を行う。また併せてガイド付きツアーの造成により、特別感のある見学プログラムの提供を行う （主な取組内容） ・見学道整備及び採掘関連遺構の顕在化 ・解説板の整備（多言語標記） ・ガイド養成 ・限定ツアーの造成／展開 ※事業番号 1-①、1-④に関連する整備事業
実施主体	大田市
実施時期	令和 7 年度～令和 9 年度
継続見込	事業収入により継続
アウトプット 目標	訪者満足度の向上
必要資金 調達方法	5 0 百万円 内訳：2 5 百万円（国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（文化庁）、2 5 百万円（自己資金） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する

8-2 特別の措置に関する事項

8-2-1. 必要とする特例措置の内容

事業番号・事業名	
必要とする特例の根拠	文化観光推進法第 条（ 法の特例）
特例措置を受けようとする主体	
特例措置を受けようとする事業内容	
当該事業実施による文化観光推進に対する効果	

8-2-2 オブジェ等の設置に関する取組等

申請の名称	
申請の根拠法令・条項	
設置の目的	
設置期間	
設置場所	
オブジェ等の構造	
オブジェ等の工事実施の方法（※）	
工事期間（※）	
復旧方法（※）	
関係協議先	

（※）定まっている場合に記載してください。

また、設置場所付近の見取図その他の補足事項があれば参考資料として添付してください。

8-3. 必要な資金の額及び調達方法

	総事業費	事業番号	所要資金額	内訳
令和6年度 (2024年度)	13.8百万円	事業番号1-②	5百万円	3.3百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 1.7百万円(自己資金)
		事業番号1-④	1百万円	1百万円(自己資金)
		事業番号1-⑥	4.8百万円	4.8百万円(自己資金)※地域おこし協力隊制度を活用
		事業番号4-②	3百万円	2百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 1百万円(自己資金)
令和7年度 (2025年度)	83.8百万円	事業番号1-①	9百万円	6百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 3百万円(自己資金)
		事業番号1-②	10百万円	6.7百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 3.3百万円(自己資金)
		事業番号1-③	6.6百万円	4.4百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 2.2百万円(自己資金)
		事業番号1-④	2百万円	2百万円(自己資金)
		事業番号1-⑤	2百万円	1.3百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 0.7百万円(自己資金)
		事業番号1-⑥	9.2百万円	9.2百万円(自己資金) ※地域おこし協力隊制度を活用
		事業番号2-①	5百万円	3.3百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 1.7百万円(自己資金)
		事業番号2-②	3百万円	2百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 1百万円(自己資金)
		事業番号2-③	7百万円	4.7百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 2.3百万円(自己資金)
		事業番号3-①	3百万円	2百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 1百万円(自己資金)
		事業番号4-②	3百万円	2百万円(文化観光推進事業費補助金(文化庁)) 1百万円(自己資金)

		事業番号5－①	9百万円	6百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 3百万円（自己資金）
		事業番号5－②	15百万円	7.5百万円（国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（文化庁）） 7.5百万円（自己資金）
令和8年度 （2026年度）	133.2百万円	事業番号1－①	30百万円	20百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 10百万円（自己資金）
		事業番号1－②	10百万円	6.7百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 3.3百万円（自己資金）
		事業番号1－③	6.6百万円	4.4百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 2.2百万円（自己資金）
		事業番号1－④	2百万円	2百万円（自己資金）
		事業番号1－⑤	0.4百万円	0.3百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 0.1百万円（自己資金）
		事業番号1－⑥	9.2百万円	9.2百万円（自己資金）※地域おこし協力隊制度を活用
		事業番号2－①	12百万円	8百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 4百万円（自己資金）
		事業番号2－②	3百万円	2百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 1百万円（自己資金）
		事業番号3－①	3百万円	2百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 1百万円（自己資金）
		事業番号4－①	4百万円	4百万円（自己資金）
		事業番号4－②	3百万円	2百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 1百万円（自己資金）
		事業番号5－①	30百万円	20百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 10百万円（自己資金）
		事業番号5－②	20百万円	10百万円（国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（文化庁）） 10百万円（自己資金）
令和9年度 （2027年度）	56.8百万円	事業番号1－①	6百万円	4百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 2百万円（自己資金）
		事業番号1－②	5百万円	3.3百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 1.7百万円（自己資金）

		事業番号1－③	6. 6百万円	4. 4百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 2. 2百万円（自己資金）
		事業番号1－⑤	0. 4百万円	0. 3百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 0. 1百万円（自己資金）
		事業番号1－⑥	4. 8百万円	4. 8百万円（自己資金）※地域おこし協力隊制度を活用
		事業番号2－①	7百万円	4. 7百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 2. 3百万円（自己資金）
		事業番号4－①	6百万円	6百万円（自己資金）
		事業番号5－①	6百万円	4百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 2百万円（自己資金）
		事業番号5－②	1 5百万円	7. 5百万円（国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（文化庁）） 7. 5百万円（自己資金）
令和10年度 （2028年度）	7. 4百万円	事業番号1－⑤	0. 4百万円	0. 3百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 0. 1百万円（自己資金）
		事業番号2－①	7百万円	4. 7百万円（文化観光推進事業費補助金（文化庁）） 2. 3百万円（自己資金）
合計	2 9 5百万円			

※国の予算事業等について、記載の通り調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

9. 計画期間

令和6年度（2024年度）から令和10年度（2028年度）までの5年間とする。